
【APH】セリアの街の陰陽師

宮原 司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【APH】セリアの街の陰陽師

【Nコード】

N4290W

【作者名】

宮原 司

【あらすじ】

セリアの町には現存する最高の陰陽師がいた。

アルフレッド「暇なんだぞ」

菊「暇は良いことですよ」

いつものようにのんびりお茶を飲む陰陽師本田菊に、自称HEROの錬金術師アルフレッド・F・ジョーンズ。この二人がメインのお話。

一章、二章完結しました。現在は三章を更新中。外伝を1話あげました。

***Prologue* (前書き)**

プロローグです。

たまに更新します。

* Prologue *

背の低い樹が立ち並ぶ林の中を青白い炎がゆらゆら宙を舞い、一つの影がそれを追う。

「はっ！」

闇に溶ける様な藍染めの和服の青年が両手で持った刀を一文字に振り払う。ゆらゆらと宙を舞っていた炎は刀をヒラリと避け、少し盛り上がった丘へと逃げる。

「アルフレッドさん。そちらに行きましたよ！」

藍染めの和服を着た黒い髪の青年の合図に呼応するかの様に青白い炎が目指す丘の上で両手に銃を構えた青年が微かに頷いた。美しい十字架が彫られた銃を手の中で器用に回して見せ、

「Good bye！」

青白い炎に標準を合わせ、炎の真ん中で蠢く核目掛けて引き金を引く。銀で出来た数発の銃弾は寸分狂わず炎の核を撃ち抜き、炎は消失する。

「DDDDDD！HEROの勝利なんだぞ！！」

小さな丘の上で嬉しそうに（近所迷惑にならない程度に）叫ぶアル

フレッド。月明かりに照らされ、少し離れたここからでも彼の特徴的なくすんだ金髪がよく見える。薄い黒に灰色のチェックが入ったパーカーは前が開いており、シンプルな白いシャツが見える。ベージュのストラックスに通したベルトには銃を下げる為のホルダーがぶら下がっていた。叫ぶアルフレッドに菊は最初からそれくらい冷静に対処して欲しいと心の中で思う。青白い炎を退治して欲しいと言う依頼によりこの林にやって来た菊達。が、アルフレッドが青白い炎を見た瞬間、人魂だああああ！！と走って逃げてしまった。その為、菊は老体に鞭を打ってアルフレッドが戻るまで炎を一人で退治していたのだから。溜め息を吐きながら刀を左右に振り払い、鞘に戻す。

「ん？何だい菊。物言いたそうな顔をして？」

子供の頃から何一つ変わらず、青空の様に澄みきっていた蒼い瞳は、心配そうに菊を見つめていた。

「……何でもありませんよ。さて、今日はもう遅いですから依頼人の方には明日お伝えしましょう」

まだ心配そうにしているアルフレッドに早くしないと置いて行きますよ？と言って菊は林を抜ける道へと歩き出す。置いて行くと言う言葉に慌てて菊を追いかけて歩き始めるアルフレッド。そんなアルフレッドに苦笑しながら菊は夜の林を歩いた。

***Prologue* (後書き)**

このような感じで書いていきます。

01（前書き）

日常会話

トントンと包丁のテンポ良い音が台所から聞こえてくる。現在の時間は朝六時。老人の朝は早いとよく言われている事だがアルフレッドは菊に関しては少し違うと思っていた。確かに菊は自分の兄である人よりも歳上なのだがあまりの童顔さにいつも歳下？と疑ってしまう。聞いた所によると菊は永遠に近い時を生きるで有名なエルフの血をひいているらしい。老化するのも人より何十倍も遅いと聞いていたがやはり実感が湧かない。「だから私は皆さんと違うのですよ」と言われた時、「何でそうなの？人より寿命が長くて老化が遅いだけなら皆と変わらないんだぞ！」とまだ子供だったアルフレッドはそう言った覚えがある。あの時の菊は鳩が豆鉄砲を食らった様な驚いた顔をしたものだ。今は自分の兄と色々あってセリアで陰陽師として働く菊の家に住み込み（半ば強引に）で働いている。つと言っても菊の受ける仕事はそんなに無いのだが。アルフレッドはまだ包丁の音がする台所に向かい、

「菊」。手伝うんだぞ！」

割烹着姿の菊がアルフレッド声に料理の手を止めて振り返る。そしてアルフレッドの姿を視界に認めて苦笑いをし、

「それはとても嬉しいのですが、まず寝癖を直した方が良いでしょう、頭、爆発してますからとクスクス笑う菊に言われて隣の部屋にある鏡で見ると……、松ぼっくりの様に爆発した髪形になっていた。

「OH……！Noooooooooo！！」

今日も騒がしい朝から一日が始まった。

01（後書き）

想像したら笑えるかも。

02（前書き）

キレる菊。

コトリ……。事務所の客受けスペースでのんびり緑茶を飲む菊。真つ昼間だというのに事務所の中には菊とアルフレッドの姿しかない。菊の向かい側のソファーにはまだ人が座った後が残っている。間に置かれた机の上にもまだ暖かそうな湯気を立てたお茶が置いてあった。正確言えば、つい数分前まで居たのだ。

「菊。今さっき報酬を払いに来た依頼人、今すぐ殴ってきて良いかい？」

拳をわなわなと震わせるアルフレッドに菊は今日何度目かの溜め息を吐き、

「アルフレッドさん、それは幾らなんでもダメですよ」

と窘める。アルフレッドの兄も気が短く、若い頃はやんちゃですぐに喧嘩で解決しようとする所があった。その為か、『海賊紳士』や『元ヤン紳士』等と全く有り難くも無い異名を頂いている。

「だってアイツ最初に俺達に提示した報酬の半分しか払わなかったんだぞ！」

そんなのおかしいじゃないか！！とドアへと歩き始めようとしたアルフレッドが、

―バシッ！―

「い、痛いんだぞ菊……」

ドアを開けようとした手は菊が瞬時に展開した結界に阻まれた。菊はすずすずとお茶をすすりながら、

「アルフレッドさん。報酬が半分でも数ヶ月は楽に暮らせますから心配しなくても大丈夫ですよ」

につこりと笑った。付き合いの短い者は大抵この笑みでコロツと騙されてしまう。だが、そこそこ付き合いがあるアルフレッドには分かる。珍しく菊が怒っている事が。菊は報酬に関しては、生活出来ればいいと無頓着な所がある。だとしたら何故こんなに怒っているのだろうか。

「それにしてもあの依頼人。ルートヴィッヒさんの事をバカにして……」

湯呑みを持つ手にぐつと力が入っている。よく見ると菊の顔に青筋が立っている。

「ルートヴィッヒって誰だい？」

「この町に古くからいる^{エクソシスト}被魔師の一族の若き当主です」

「^{エクソシスト}被魔師？」

魔を抜う者、そのままの意味ですよと菊。まだ怒りが治まっていないのか湯呑みが手に持っているプルプル震え、湯呑みはピキピキと不吉な音をたてている。あ、何か嫌な予感がする。

「ああ、やつぱり許せません。あの依頼人を末代まで崇つてやる！
！」

「菊！？」

普段はとても穏やかな気質の菊も依頼人に友人を侮辱されてキレている。いや、それ以前に何かキラがいつもと違う気がする。部屋に籠って末代までいや、親戚まで崇つてやりますと言う菊を何とかドア前で捕獲。

「アルフレッドさんはあの依頼人の味方ですか！」

とても穏やかな気質の菊に一瞬、鬼神の様な目で見られてたじたじのアルフレッド。

「いや、でもやつぱり崇るのはマズイんだぞ……」

ぎゃーぎゃー騒ぐ二人のやり取りに事務所の入口で声をかけにくそうに立っている青年が二人。それを見て、茶髪に白いシャツに黒い薄手のサマージャケット。それに黒いスラックスを穿いた青年が不機嫌丸出しの顔で隣に立つ金髪の青年に尋ねる。

「……おい、マッチョジャガイモ」

金髪をオールバックに撫で付け、こちらは黒いシャツに同色のスラ

ックス。不機嫌丸出しの青年にマッチョジャガイモと呼ばれた青年は二人を見て難しそうな顔をして答える。

「……何だロヴィーノ」

「ホントにコイツらで大丈夫なのか？」

おいおいと青年の声にはやや呆れが含まれている。

「……あの二人の中で一人は俺より強い能力者だ」

言い合っている二人の内、藍染めの和服の青年、菊を指差す。

「じゃあ、あそこにいるもう一人は何だよ？」

ロヴィーノと呼ばれた青年はどう見てもやんちゃな若者と言った風のアルフレッドを指差して言う。

「さあな。俺が前会った時はあんな奴は居なかったな」

まあ二ヶ月程会っていなかったからなと補足説明をする青年にロヴィーノは更に不機嫌そうな顔をする。

「……………アイツら、何時まで経っても俺達に気がつかないな」

「……………やむを得ないな」

玄関から彼らの居る事務所の客受けスペースに移動し、

「お前達は何時まで喧嘩しているんだ!!」

ルートヴィッヒは客受けスペースで騒ぐ二人に容赦なく怒りの雷を落とした。

02（後書き）

次で紹介を書きます。

03 (前書き)

いきなりコメディ、そしてシリアス

―数分後―

「ルートヴィッヒさん、気づかなくて申し訳ありません……」

斯くなる上はこの腹をかつさばいてお詫びを……と本田は何処からか取り出した短刀を構えている。それを聞いて明らかに顔色を変えたのは本田の隣に座っていた青年だった。既に腹に短刀を向けた本田の手を掴んで、

「ちょ、菊、止めてくれよ！？菊にそんな事されたら新人の俺はこの業界で生きていけないんだぞ」

本田の手から短刀を奪って受付らへんに投げ捨てる青年。ルートヴィッヒは本田と普通に話す青年を見て不思議そうに見て、

「あの本田が、新人の世話役、だと……」

有り得ない……と何か意味深そうに言うルートヴィッヒに本田がにっこり微笑む。

「ルートヴィッヒさん？」

隣に座っている青年には自分を影にしてわざわざ見えない様にルートヴィツヒを脅している。(ちなみに脅している所はルートヴィツヒの隣のロヴィーノにしか見えていない)

「(おい、アイツは何者だよ)」

本田の脅しに軽く震えながらロヴィーノは隣のルートヴィツヒの腕を軽くつつく。

「(……………現存する最高の陰陽師だ)」

「(え……、アイツがか!?)」

「(ああ。普段は人と関わるのをあまり好まない奴なんだが…………)」

チラツと青年と話す本田に視線を向ける。ルートヴィツヒの知っている限りの本田菊とは何の関わりの無い奴に自分の技術や世渡りの仕方を教える奴では無かった。つまり、本田の知り合いか、何か訳ありで匿われているの青年なのだろう。そうなると本田はこの依頼を断る可能性が高い。同業者に聞いた話、本田はこの一ヶ月間はここセリア以外の依頼は受けていないのだから。だが、ルートヴィツヒもここで引き下がる訳にはいかない理由があるのだ。

「本田、重要な依頼がある」

青年と話していた本田が話を中断してルートヴィヒに向き直る。向き直った本田にきつと断られるだろうと思いつながら依頼内容を告げる。

「…………友人のフェリシアーノとアーサーの救出を手伝ってくれない

「だろっか？」

03（後書き）

微妙なところできる。

質問コーナー

菊「恐れ入ります。この度はとんだ醜態をお見せしてしまい申し訳ありません。僭越ながら今回からしななく私がお答えさせていただきます」

まさかのロヴィーノ？

菊「作者がマッチョジャガイモと言う単語を出したいが為に出ていらっしまったみたいですよ」

菊って何歳？

菊「アルフレッドさんにもお答えしましたが、2000〜3000の間ですよ。そろそろアルフレッドさんも私の腰を労ってくれると嬉しいのですが……」

アルフレッドといると大変？

菊「確かに大変ですが楽しく、充実してますよ」

04（前書き）

話の展開がわかってくる

ルートヴィッヒはまずそう言った経緯を話始めた。連盟にある仕事が届き、それにルートヴィッヒ、ロヴィーノ、フェリシアーノ、アーサー、マシューの五人で行く事になった。依頼内容は至って簡単。久しぶりに別荘を訪れたら魔獣の巣窟となっていたから退治を依頼したい、と。何しろ数が多いと言う事だったのでルートヴィッヒはよく仕事を組む魔術師兼治療師のフェリシアーノとロヴィーノ（以下二人一緒の時はヴァルガス兄弟）を誘い、偶々近くで話を聞いていた魔術師のアーサーと治療師のマシューが手伝うと言う事でその別荘に向かった。

「正直、魔獣の巣窟何て物じゃ無かった」

退治しても退治しても数が全く減らない。いくら被魔師が魔獣との戦いに有利であっても一度に調伏出来る量を遥かに上回っていた。体勢を整える為に一時撤退する事になったのだから……、

「アーサーさんとフェリシアーノさんが捕まったんですね」

「……ああ。アーサーは足をケガしたフェリシアーノを庇いながら戦っていたからな」

いざ撤退、と言う時に魔獣に囲まれて逃げられなくなってしまった。それで仕方無く、

「ルートヴィツヒさん達だけ一度出てきたのですね」

「ああ。軽蔑してもらっても構わん」

数秒間の沈黙が続いた後、

「私はそんな事しませんよ。ですが、一時撤退には反対なさった方が多かったですでしょう？」

「……………隣のロヴィーノとマシユーは『兄弟を残したく無い』とな」

ルートヴィツヒの隣に座るロヴィーノが居心地の悪そうな顔をする。菊はそれを見て、

「私は別にロヴィーノさんを責めている訳ではありませんよ。家族、ましてや兄弟を置いて行くななんて普通反対しますから」

「お前……………」

ロヴィーノにその先の言葉を言わせる事無くルートヴィツヒと話を続ける菊。

「…………アーサーには一人息子が居るらしくマシユーはしばらく面倒を見るからと来れなくなつた。兄さんは…………ちよつとファンタジーの世界に行ってしまったな。まあ、それで本田に助っ人を頼みに来た訳だ」

ここまで理解出来たか？とルートヴィツヒが聞く。菊は軽く頷くが隣のアルフレッドは茫然としていた。

「アーサー、マシユー、ピーター……」

突然の呟きは今まで話に口を出さなかったアルフレッドのものだった。菊は隣で辛そうに呟いたアルフレッドを見て、

「アルフレッドさん。ここに書いてある物を買ってきてくれませんか？」

「え？」

いきなり自分の名前が出てびっくりした様に顔を上げるアルフレッド。

「もし私が行かなかったら一人でも行く気だったのでしょう？それならば私も行きましょう。だからその為の道具を買ってきてくれませんか？」

「え、で、でも菊は……」

まだ渋っているアルフレッドにルートヴィッヒが何かに気づいた様な顔をした。菊はそれを横目で見ながらアルフレッドを無理矢理立たせる。

「私は大丈夫ですから」

とアルフレッドの背中をぽんと軽く押し、ちゃんとお金まで持たせて事務所の外に出してしまう。

「……………本田。アイツはもしかしてアーサーの家族か？」

あのアーサー似の癖ッ毛、間違えなく彼は……。

「……………。アーサーの弟でマシューさんの双子の弟に、なりますね」

「アーサーの家族の一人が二ヶ月くらい前から行方知らずだと連盟では聞いていたが……。まさかお前の所に居たとはな」

一体何時から居たんだとルートヴィツヒの至って自然な問い。

「そうですね……。あれは一ヶ月半前の雨が降った日でした」

04（後書き）

菊「腰が痛いので質問コーナーはお休みです」

アルフレッド「菊はおじいちゃんだから仕方がないね！HEROの俺がばっちり介護するんだぞー！」

菊「……余計腰が心配です」

05（前書き）

アルフレッド「Hello！今日は何か菊が腰が痛いって言うてたからHEROの俺が何でも答えるぞ！！あ、メタボじゃないからね！よし、物語を始めるぞ。ちなみに反対意見は認めないぞ」

私はその時、夕飯の買い出しに出ていました。仕事も一ヶ月にある程度こなしていれば普段の日常生活に余る程でしたから。それで買い出しから帰って来たらアルフレッドが玄関前に立ってらっしゃったんです。たいそう濡れていらっしやったので私は声をかけて家の中に入れたんです。

「それが始まりか……」

そう言えば本田はアーサーとよく仕事に行っていた。だからアルフレッドの事を知っていたんだなと心の中でやっと納得するルートヴィッヒ。

「ええ。話を聞いてみたらアーサーさんの仕事の手伝いがしたくてアルケミスト錬金術師の資格を取ったらしいんです。が、その……、肝心のアーサーさんにアルケミスト錬金術師になる事を反対されてしまって……。それで家を出したそうです」

「……町から出ないのにはちゃんとした理由があつたんだな」

また引きこもりかと思って心配していたとルートヴィッヒ。菊はそんなルートヴィッヒに苦笑して見せ、

「はい。まだ新人のアルフレッドさんを町の外に出す訳にはいきませんから」

にっこり（怒）と微笑む本田にルートヴィッヒの背中に鳥肌が立つ。目の前でにっこりと微笑む本田はまるで般若の様。普段は気に入らないと寄り付かないロヴィーノも恐怖からか自分に張り付いている。早く帰って来い、アルフレッド。それが今のルートヴィッヒの切実な願いだった。

05（後書き）

質問コーナー

フェリシアーノとイギリスって珍しいね？

アルフレッド「勿論、厳正なるくじ引きの結果なんだぞ」

メタボなの？

アルフレッド「だからメタボじゃないって！何で皆アーサーみたいな事を言うんだい？」

アルフレッドって何歳なの？

アルフレッド「今は19だけど今年で20になるんだぞ！！ちなみに誕生日プレゼントはアーサーのスコーン以外で頼むよ」

油でベトベトのフィッシュアンドチップスとかは？

アルフレッド「君は俺を殺す気なのかい！？……分かったよ。アーサーの料理、特にマーマイト以外で頼むよ」

何でお化けが恐いの？

アルフレッド「あのさそれ、聞くな普通……。子供時に気配も感じて声も聞こえるって状態で全くお化けが見えなかったからなんだぞ。その度にマシューかアーサーと一緒に寝てた気がするよ」

やっぱりアーサーの料理は嫌？

アルフレッド「絶対、死んでも嫌だよ。あれで本人の自覚無しってある意味恐い事だね」

菊とは何時から知り合いなの？

アルフレッド「やっとまともな質問がきたよ。アーサーが暇な時、確か5〜10歳まではよく遊んで貰ってたよ。アーサーが結婚してからあまり会わなくなっただけ……」

何で銃を使うの？ついでに何故に二丁？

アルフレッド「H A H A H A ！ ！ 君は面白い事を聞くね。HEROの武器はいつの時代でも銃って決まってるんだぞ！銃を二丁持つてるのは一つじゃ自分の命しか守れないから二つ持って誰かの命を守る為なんだ！！」

じゃあ菊とアーサーはいつから知り合いなの？

アルフレッド「俺も子供だったからなあ……。でも小さい頃に家族が死んで、それからはアーサーが俺達を育ててくれたから多分14、15年くらい前からだと思っただぞ！」

二丁なのはてっきりカウボーイに憧れてだと思ってたよ

アルフレッド「確かにカツコイイけどやっぱりHEROが一番だからね！！」

お知らせ

アルフレッド「俺の家出編とアーサー・のやけ酒編。みんなはどこ
らを先に読みたいんだい？それによっては更新の順番が変わるら
しんだぞ」

06 (前書き)

とみせかけて紹介文だったりする。

セリア

菊達の暮らす緑豊かで四季の移り変わりを感知することができる数少ない町の一つ。

アルケミスト
商業も盛んで錬金術師も多数住んでいる。
エクソシスト
祓魔師の連盟本部がある。

本田菊 陰陽師

年齢：本人曰く200〜300歳。

身長：165cm

武器：日本刀、暗器

現存する最高の陰陽師。

本人にはそんな自覚はないらしい。

エルフ迫害を受け、エクソシスト 祓魔師の連盟からはだいぶ前に脱退した。

アーサーがパートナーになるまでは引きこもり気味だったらしい。

オタク物はやっぱり好きみたい。

夜になると「私の時間が来ました……」、部屋にこもるらしい。

アルフレッド達とは長いつきあいで色々知っている。
ロストマジック

エルフの特権とも言われる魔術や消滅した魔法を操る。

アルフレッド・F・ジョーンズ（Alfred Foster Jones）
アルケミスト 錬金術師

年齢：今は19歳もう少して20になる。

身長：177cm

武器：魔銃

菊の家に勝手に転がり込んだ自称HEROの錬金術師。
アルケミスト

約10歳年上のアーサーと双子の兄マシューがいる。

19なのにもう叔父さんと呼ばれて不機嫌。

両親は4歳の時に事故で他界。それからはアーサーと菊に育てられた。

アーサーに反対された為に家出。旧姓はアルフレッド・ウィリアムズ。

アルフレッド・f・ジョーンズと名前を改名する時、菊と一緒に考えてくれたので大事にするつもり。

子供時に気配も感じて声も聞こえるという状態で全くお化けが見えなかったからかお化けは苦手。

メガネで見えるがいやなときははずす。

ルートヴィッヒ・バイルシュミット (Ludwig Beilshmidt) エクスシスト 被魔師

年齢：見た目によらず21歳

身長：180cm

武器：鞭（決してDSではない）

セリアの町に古くから住む一族の被魔師。エクスシスト

菊とはそれなりにつきあいがあるらしい。

兄のギルベルト、弟が一人いるがこちらは不明。

父のフリッツに似ていないのを少し気にしている。

兄のギルベルトが小鳥好きなせいかよく小鳥の世話を任される。

フェリシアーノとは中学時代からの知り合い。

ロヴィーノ・ヴァルガス (Lovino Vargas) ?

年齢：22歳

身長：173cm

武器：自動拳銃

セリアの町に住む連盟には所属しているが何をやっているのか分からない青年。

事実、魔術と治癒術を使う。どちらかというと魔術寄り。

両親はすでに他界しており、祖父はバイルシュミット家の祖父と世界旅行中。

何だかんだ言いながら弟は大事。

マシュー・ウィリアムズ（Matthew Williams）
治癒術士^{ヒーラー}

年齢：19歳だよ

身長：175cm

武器：弓

ロアン出身の優しくておおらかな青年。

弟のアルフレッドやアーサー、甥のピーターに振り回され日々「コノヤロー」と思うが口には出さない。シロクマのクマ次郎を飼っているが名前を覚えられないし、覚えてももらえない。

優秀な治癒術士だが仕事がないときはシロクマ牧場でのんびり過ごすらしい。

お化けの類いは子供の頃から見えている。

06 (後書き)

今回はこんな感じで。

アルフレッド「前に紹介するって言って書き忘れてたからだろうね」
菊「……大人の事情でしょう」

ただアーサーの手伝いがしたい、最初はそれだけだった。子供の頃、お化けが何処にいるのか姿は見えなくても、気配や声だけが聞こえるなんて事が多々あった。マシユーやピーターは見えてもその存在は俺の目を素通りする。何か道具があれば助けられたのに……と嘆き、落ち込むをアーサーを沢山見てきた。多分そんなアーサーを見て、必死で治療するマシユーを見て、俺は錬金術師アルケミストになろうと決めたのだから。菊の家に居候し始めてから始めにアルフレッドが生成したのは今かけているこのメガネだ。これさえあれば大嫌いなお化けが見えるのだが……、やっぱり嫌いな物は嫌いだ。だがそろそろ克服、もしくは慣れないと菊の腰がヤバイ。そう自分を納得させ、下町の商店街を歩きながら菊がよく行く専門店へ。ドアを上げると呼び鈴が小さくチリリンと鳴る。

「よう、アルフレッド！今日は珍しく菊さんと一緒じゃないんだな」
恰幅の良い専門店主人が暖簾を押し上げて休憩室から出てくる。いつも下半身だけの短いエプロンをかけている主人を見るといつも酒に酔ったアーサーを思い出してしまう。

「ああ！今日はHEROがお使いなんだぞ！！それで、ここに書いてあるやつを貰えるかい？」

カウンターでメモ紙を受け取って分かったと答え、忙しく棚から道具を出していく主人。その間、暇だったアルフレッドは適当に店内

をぶらつく。

「商品には触らないでくれよ?」

と忙しく動きながらも注意を呼び掛ける主人。アルフレッドが見ていたのは一冊の本のページだった。『Guilty(罪)』、『Judgment(裁き)』と書かれ、銃身に十字架が彫られた二丁の銃が載っている。

「ん? ああ、そう言えばアルフレッドは銃使いだったな。そいつらは魔力をあまり持たない人間でも霊を退治出来るって銃さ。今は誰が持つてるんだろうな」

自然とアルフレッドの手がベルトに掛かった二つのホルダーを手を置く。下がった二丁の銃の銃身には十字架が彫られているのがホルダー越しでも感じられる。

「そんな銃だったんだな……」

ポツリと呟きを漏らしたアルフレッドを専門店の主人は不思議そうに見る。

「? アルフレッド、道具はもう包んで置いたよ」

ありがとうと言って菊から貰ったお金で道具代を払う。ずっしりと重い紙袋を持って、アルフレッドは店の外に出た。

07（後書き）

菊「私、名前しか出てませんね……」

アルフレッド「やっとHEROのターンが来たね」

菊「……。あ、そういえばアルフレッドさん」

アルフレッド「どうしたんだい菊？」

菊「まだ始まって二週間と少しなのにも関わらず1000クリック超えましたよ」

アルフレッド「おおおおおー！」

菊「ということで皆さんに前も言ったアンケートを実施します」

アルフレッド「俺の短編かアーサーの短編のどっちが先に読みたいかもしくはどちらもか、だったんだぞ」

菊「……（選択し、増えてませんか？」

アルフレッド「感想、投票。待ってるんだぞ!!」

08 (前書き)

アンケートを取った短編です。

『自棄酒アーサー』

何時もは賑わうパブから人が消える時間帯がある。最近の夜遅くに物凄く酒癖の悪い青年が来るのだ。ツンツンとした癖毛のある金髪がパブの照明を受けて反射し、光っている。ゆったりとした魔術師用の長い濃緑色のローブ。若草色のシャツに黒いスラックスと服装に拘らない魔術師にしては洒落者だった。今日もまたやって来てパブの一角に座り、適当に酒を頼む。恐る恐る酒を持ってきたマスターが机に酒を置く。10年程前からこのパブにやって来る様になった青年、アーサー・カークランド。酒癖は悪くてもここまで自棄に飲む奴では無かった。しばらくすると、アーサーお決まりの自棄酒相手が店に入って来た。が、今日はモザイクが必要らしい。パブのマスターはそれを見ないようにし、そろそろと店の奥に引っ込んだ。柔らかな金髪を持った青年はアーサーの隣に座り、

「よう、アーサー」

片手を上げて適当に挨拶をする。アーサーはまだ完全に酔ってはいないらしく、相手の顔を見る為にゆっくり隣を向く。そして、

「お、お前っ!!」

赤面して手に持っていたグラスの酒を思い切りぶっかける。何とその青年……、ほぼ全裸だった。正確に言えば、頭には猫耳の力チューシャで下には美しい薔薇が咲いている。青年は至って普通に（

酒で濡れた体）、

「あ、酔いが覚めた？」

そう聞いた。アーサーはダンツと手に持ったグラスを机に叩きつける様に置き、

「覚める所じゃねえーよ、この変態フランススー！」

席から突き飛ばしてガスガスと蹴りを入れる。勿論、薔薇を器用に避けて。

「ちょ、お兄さんは蹴られると死んじゃうんだけどー！」

「じゃあ死ねよ！」

ちなみにこのやり取り、次の日の朝方まで続いたらしい。

『家出』

「アーサーの人でなしー！」

ガタンツ！とわざと大きめな音を立ててドアを閉めてやる。廊下を照らす照明にくすんだ金髪が反射した。薄い赤に灰色のチェックが入ったパーカーは前が開いており、シンプルな白いシャツが見える。枯草色のスラックスに通したベルトには銃を下げる為のホルダーがぶら下がっていた。が、そこにはまだ銃らしき物は納まっていない。そのまま真っ直ぐ保管庫へと足を向ける。今日こそ長年考えていた事を実行に移すのだ。つまり……、家出すると言う事。始まりは些細な喧嘩だった。アルフレッドはアーサーの仕事の手伝いがしたくて錬金術師アルケミストの資格を取って、それをアーサーに伝えに言った。するとアーサーは錬金術師になる事を許さないと云ってきたのだ。信じられなかった。アーサーは今までそんな事をアルフレッドに言わなかったから。だからこそ、アーサーに認めて貰う為には……、

「家を、出るしか無い……」

保管庫のドアに手をかけて、迷いを振り払う様に一気に押し開けた。中には年期の入った甲冑や剣などに紛れて小さな箱が二つ置いてあった。アルフレッドはその箱の蓋をゆっくりと開け、中身の銃をホルダーに仕舞う。これはアーサーが20歳になったらくれると言っていた物だ。だが、家出するアルフレッドはまだ19で20までには半年近くある。

（要は気分の問題さ！）

すぐに自分の部屋に戻って必要な物だけをデイパックに詰める。ロッカーに隠したへそくりをポケットに突っ込んで部屋を出る。アーサーはまだ先程の部屋から出てきて無いらしい。この屋敷には双子の兄のマシューやアーサーの息子のピーターも居る。見つからない様に細心の注意を払いながら裏口からこっそり出る。……よし、バレて無い。これから何処に行くかはまだ決めていなかった。アル

フレッドが知っている場所と言えば、ここロアンと橋で繋がった隣のアリシア。そして……、歩けば半月程かかる所にあるセリアの三つだけ。隣町には顔が知られている為無理だ。よって……、

「セリア、か……」

子供の頃からお世話になっている青年はまだ自分の顔を覚えているだろうか。ここ一年でかなり背が伸びたからなあ……。

「……まあ、俺はHEROだから何とかなるんだぞ！」

自分で気合いを入れて、アルフレッドは夜の町へと消えた。その半月後、物語の歯車が回り始める事になる。

08 (後書き)

菊「どうでしたでしょうか？」

アルフレッド「ちなみに感想が貰えただけで作者が画面の前で踊り狂うらいしんだぞ」

菊「それは酔っ払ったアーサーさんではないですか」

アーサー「誰が酔っ払いだ!!」

09 (前書き)

ロブイノside

目の前にソファーにのんびり座ってお茶を飲む青年、本田菊をロヴィーノは複雑な思いで見ている。隣のマッチョジャガイモの話によると、今回一緒に魔獣退治に行ったアーサーの元パートナーらしい。だがこの本田菊と言う奴は連盟で体格が細い方に入る俺やフェリシアーノよりも細い。こんな奴がホントに現存する最高の陰陽師なのだろうか。

「ロヴィーノ？」

しばらく黙っていたからだろうか、マッチョジャガイモが話しかけてきた。こういう大事な時にいつも寝るフェリシアーノの様に扱われてロヴィーノは何だか無性に腹が立ってきた。

「俺はフェリシアーノみたいに寝たりするかよコノヤロー!!」

そう返してやった。するとマッチョジャガイモは怪訝そうに顔を傾げ、

「……ロヴィーノは何をイライラしているんだ？」

俺の目の前で本田に相談し始めやがった。普段ならフェリシアーノが慌てて止めに入るのだが今は居ない。だから本田に思いきって聞いてみる事にした。

「お前、ホントにすげえ陰陽師なのか？」

すると本田は驚くべき回答を解してきた。

「さあ？ご想像にお任せします」

偉ぶる事も自慢する事も無く、ただそちらにお任せします、そう言うてきた。これがマツチヨジャガイモが本田を評価している一つでもあるのだろう。

「……分かったよ。そう信じといてやる」

どのみちフェリシアーノを助ける為には本田とアルフレッドの協力が必要なことから。ロヴィーノは足を組み直して本田が出して机に置いたままになっているお茶に手を伸ばした。

09（後書き）

アルフレッド「うわぁ……」

菊「……何ですか？」

アルフレッド「疑われまくりだね」

菊「仕方ないですよ」

アルフレッド「諦め早いよ菊!!」

10（前書き）

10話目きました！！

「買ってきたんだぞー!!」

玄関から隣の家まで聞こえる様な大声でアルフレッドが言う。菊は苦笑し、ルートヴィツヒは顔を歪め、ロヴィーノはバカかアイツ呟いた。菊はそんな二人に関係無く、アルフレッドの買ってきた道具で準備を始めている。

「これがあれば詠唱が楽ですね……」

等と菊は言いながら道具を小さめのデイパックに丁寧に詰めた。ちなみにアルフレッドのデイパックはハンバーガーやら何やらとほぼ関係ない物で埋めつくされている。

「こういう時に性格の差が出るな……」

真面目な菊に大雑把なアルフレッド、まさに凸凹コンビである。

「詰め終わったんだぞー!!」

嬉しそうに言うアルフレッドだが、デイパックの口が閉まっていな
いのがありありと現れている。仕方がなく菊がそれに手を伸ばし、
一つ一つ整理しながらもう一度詰め直し始めた。手慣れている所か
らいつもアルフレッドの荷物を詰めているのが菊だと言う事が分か
る。その様子は、まるで過保護な親の様。菊がアルフレッドの荷物
を詰め終えたその時だった。

「ギヤアアアアなんですよ」

と叫びながら10歳くらいの少年が荷物整理をし終わった（アルフレッドの荷物を）菊の上に落ちてきた。そして、

「う、うわああああゝ!!」

また一人の青年が今度は菊を助けだそうと動き出したアルフレッドの上に落ちてくる。

「ぐふっ!?!」

「重!?!」

ほぼ同時に起こった為か、二人の悲鳴も同時だった。ルートヴィッヒ達が呆気に取りられている間に突然の二人の乱入者は二人の上からゆっくりと体を起こした。

「マシユー、痛いですよ……」

アルフレッド似のくすんだ金髪が少年の被った水色の帽子から見えている。白いシャツに表側が水色と裏側が白のケープ、それに子供らしい半ズボン。一目でオーダーメイドされた高級子供服だと分かる代物だった。少年は何とか唸っている菊の上から脱出した。

「もう……。ピーターが変な所で転送魔術を使うからだよ」

こちらの青年は驚く程にアルフレッドと面差しが似ていた。薄い柔らかな金髪にぴょんと一本の髪が飛び出ている。寒い所に居たのだ

ろうか、深紅色の外套衣に長袖の白シャツにブラウンのスラックス。掛けられた銀縁のメガネはアルフレッドのと違い、ちゃんと度が入っている様だ。そして心なしか影が薄かった。マシユーと呼ばれた青年は押し潰しているアルフレッドに気付き、呆れ顔が愕然とした表情に変わる。

「え……、ア、アル!？」

急いでアルフレッドから飛び退いて菊の近くでぶつぶつ言っているピーターを呼び寄せる。

「ア、アルフレッドじゃないですか!マシユー、何でこんな所にアルフレッドが居るですか!？」

飛び上がる程に驚いたピーターの叫びを聞きながら菊は何度もふらつきながらも立ち上がった。アルフレッドもマシユーとピーターを見つめたまま、同じ様に立ち上がる。

「マシユー、ピーター……。二ヶ月ぶりだね」

気不味いから軽く手を上げて答えるアルフレッド。

「に、二ヶ月ぶりって……。アルが簡単に言うなよ!アーサーさんもピーターも僕も、どれだけ心配だったか……」

「そうですよ。アーサーの野郎何か、毎日アルフレッドを探して見つからない度に自棄酒で相手をするフランスが大変だったんですよ!」

捲し立てる様に言われてたじたじのアルフレッドを菊は苦笑しながら

ら見つめている。そして、

「マシュー、ピーターちょっと待ってくれよ。何でアーサーの自棄酒を止めないんだい!？」

「だってフランスさんが『ここはお兄さんの出番だよ』って……」

折角申し出てくれたから任せただけだと当たり前のように言うマシュー。アーサー似の中々いい性格をしているみたいだ。

「それにピー君は未成年ですよ」

パブに入れて貰えるはずがないじゃないでしかと立て続けに言うピーター。呆気にとられてすっかり蚊帳の外に出されてしまったルートヴィッヒとロヴィーノ。菊は話に収集がつかないそうなので、

「三人共落ち着いて下さい。私達はこれから仕事なのでマシューさんとピーター君はここで待っていて下さい」

有無を全く言わせない菊の言い方にムツとした様な顔をするピーター。それを見たマシューがピーターをまあまあ落ち着いてと宥める。そして、

「菊さん達の仕事はアーサーさん達の救出ですよ？それなら僕達も連れて行ってください」

10（後書き）

アルフレッド「みんなにお知らせがあるんだぞ！」

菊「何と、セリアの街の陰陽師が2300クリック？に達していました」

アルフレッド「しかもHETAWORLDまで3300クリック？を超えたんだ！！」

菊「皆さん有り難うございます」

アルフレッド「これからも俺の活躍を見てくれよ！」

深々と頭を下げて頼むマシュー。まだムツとした表情のままだったピーターもマシューの隣でちょこんと頭を下げた。

「何を言ってるんだいマシュー！君はともかくピーターは戦えないじゃないか！！」

「なっ……！ピー君はアルフレッドと違って魔術が使えるから足手まといにはならないですよ！！」

「俺は魔銃士だから良いんだよ！」

10歳と低レベルな争いを繰り広げるアルフレッド。正直大人気ない。そんな二人を気にしながらもマシューは菊に交渉する。

「あの……菊さん。良いですか？」

「私は別に構いませんよ？ただ、ピーター君を庇いきる自信は無いです」

ピーター君が戦えるとは思えませんか？と難しい顔をする菊。マシューは一樣賛成してくれた事に一先ず安堵した様な顔をし、

「それは大丈夫です。僕がステルスをかけますから」

「……あの敵から姿が見えなくなるやつか？」

今まで話に加わる事が出来なかったルートヴィツヒが参戦。ちなみにロヴィーノは話に加われない事にふてくされてお茶をがぶ飲みしている。

「はい。何故か僕もステルス使って無いのに敵に見えてないみたいで……」

——ドッカーンッ——

「……すって、え？何？」

事務所の中で言い合っていた二人がいつの間にか居なくなっている。

「え？え？アルとピーターは？」

マシユーが事務所内を見渡して二人の姿を探すが何処にも見当たらない。すると外から賑やかな声が聞こえてきた。

『——ウインドですよ！』

事務所の外を突風が吹き荒れる。ガタガタとドアが嫌な音を立て、それが治まったと思った瞬間、

『フレイムガンナーなんだぞ！』

今度は炎が事務所の前を駆け抜ける。どうやら本格的な喧嘩が始ま
ってしまっただ様だ。

「つか、止めないとその内事務所も余波で吹っ飛ぶんじゃないの？」

さらりと他人事の様に言うロヴィーノ。話に入れて貰えなかった事
を絶対根にもっている。

「しかしどうやって止めるんだ？普通の方法では……ん？」

ピタリと先程までの外の騒ぎが嘘の様に静まり返ってしまった。

『あ、あれ？魔術が使えないですよ！？』

『玉切れじゃないのに動かないんだぞ？』

二人同時に驚きの声上がる。マシユーが先に外に出て、その後
ルトヴィツヒが続く。ロヴィーノがルトヴィツヒを追って事務
所の外に出ようとした瞬間、本田に向かって急激に魔力が収縮して
いくのを感じた。入り口付近に立ち、本田の様子をこっそりと伺う。
ほっと一息ついて本田は、

「久しぶりに^{フィールドデイスベル}広範囲解呪文を使いましたがまだ鈍ってない様で良か
ったです」

^{フィールドデイスベル}広範囲解呪文だと？それは数十年前に最後の使用者が死んだため、現
在では消滅した魔術。^{ロストマジック}効果は文字通り広範囲の魔術を打ち消す物だ。
それを本田が使える何て有り得ない。あれは遠い極東の国で生まれ、
その土地の者しか使えない魔術なのだから。今のが本当に^{フィールドデ}広範囲解
イスベル

呪文だとしたら……、

「（本田は一体何者なんだ？）」

マッチョジャガイモは魔力の収縮に気づいただろうか。……いや、アルフレッド達を叱っているから気づかなかったみたいだ。少し本田菊と言う人物を調べてみる必要があるかも知れない。そう考えてロヴィーノはそのままアルフレッド達の居る外に出た。

11（後書き）

菊「アルフレッドさん……」

アルフレッド「ど、どうしたんだい菊？」

菊「……この一週間で500程の方がセリアを見て下さってます」

アルフレッド「それは良いことじゃないか……！」

菊「……腰痛に響くんです」

アルフレッド「え？なんでだい？」

菊「年寄りですから」

「……気を取り直して、そろそろ行きましょうか」

まだ視線でバチバチと火花を散らした低レベルな争いを続けているピーターとアルフレッドをほっておいて言う菊。ルートヴィヒは呆れ顔をし、ロヴィーノは我関せずとお茶を飲み、マシューはどうやって止めようかと考えていた。

「だからメタボ何ですよ、アルフレッドのバーカ!!」

ベーと舌を出して言うピーターにアルフレッドも負けじと言い返す。もうこれでは子供の喧嘩。アルフレッドさんはもう19歳なのにと溜め息を吐きたい菊だった。

「H A H H A ! ! H E R O の辞書にはメタボ何て酷い言葉は無いんだぞ!」

何かもう……遠足に行くようなノリになってます。しかしこのままではアーサーさん達が……。

「お二人共、アーサーさん達を助けに行かないのですか?」

すると、示し会わせた様に、

「行くですよ!!」

「行くんだぞ!!」

同時に返事が返ってきました。何だかんだ言いながらもこの二人、結構似ていると思うのは私だけでしょうか。アーサーさんも似た二人だと仰っていましたか……。

「では、参りましょうか」

菊は机に置きっぱなしになっていたデイパックに手をかけた。

12（後書き）

アルフレッド「短いよ……」

菊「丁度内容がきれた所できつたらこうなつたみたいですよ」

アルフレッド「でも短い」

菊「……………遺憾の意」

『迷子』

セリアにある広い連盟本部の一角に赤、緑、黄、黒の格子柄タータンチェックの部屋があった。そこでまだ五歳に届くか届かないかの子供が二人遊んでいた。一人はくすんだ金髪に深い青みがかかった蒼い目、くるんと一本髪が飛び出していた。子供用の白シャツに焦げ茶の上衣、長めのズボンととても穏和そうな少年。もう一人は金髪に同じく髪が飛び出ているがこちらはぴょんと言った感じだ。少年と同じく、蒼い澄んだ綺麗な目をしていた。それに子供用の白シャツにベージュの上衣、丈の短いズボンを穿いた快活な印象が持てる少年。少年達は目の前の積み木や絵本に夢中になっていた。が、

「ましゅー。あーさー、遅いね」

ましゅーと呼ばれた少年は読んでいた絵本から目を離して、

「それは仕方ないよ、ある」

あーさーさん、きっと忙しいんだと言ってまた絵本を読み始めるましゅー。それだけで終わらされたあるはむっとした様な顔をして遊んでいた積み木の山の一つを床に投げつける。要はただの八つ当たりだ。だが、静かに絵本を読みたいましゅーとしては、

「ある。うるさいよ……」

積み木を床に投げつける音がうるさくて仕方ない。全く正反対の性格をした二人。そして、

「それならあーさーを探しに行くんだぞ」

唐突なあるの言葉。

「え……ええっ!!」

もちろん彼の唐突さをよく知っているましゅーも驚く。

「でもあーさーさんはここで待ってろって……」

それに、怒られるよ?と言いましゅーの言葉を完全に無視して、

「だって帰ってくるの遅いよ。だから俺が探しに行く。ましゅーはここに居るといいんだぞ」

そう言つと勝手に部屋から出ていってしまった。そこに一人部屋に残されたましゅーは心配そうな顔をして、

「ある、大丈夫かな?」

ボソリと呟いた。

部屋の外に出てすぐ後悔した。周りは大人ばかりで背の低い自分にはどうなっているか分からない。たまに声をかけてくる大人もいるが決まって『迷子か?』と聞いてくる。あまりにしつこいからそれはもう気にしない事にした。あるふれっどは迷子ではなくあーさーを探しているのだから。しばらく大人達の足の海を歩き続けた。すると、開けた場所に出た。今日あの部屋に行く前に通った広場。つまりあーさーはここに居る?とにかく、

「あーさー!」

広場で声をかけて回る事にした。だが、この広場は子供のあるふれっどの足には広すぎた。

「つ、疲れたんだぞ……」

丁度目についたベンチにちょこんと座る。ふうと一息ついてあーさがいないか辺りを見回す。が、背の低いあるふれっどには通る大人の顔が見えない。もう部屋に戻ろうかと思つて気がついた。自分がどの道から来たか分からない。

「ま、迷ったんだぞ……。全く早く来ないあーさーが悪いんだ」

自分が迷ったのが悪いのにも係わらず、あーさーのせいにするあるふれっど。すると、一体何を思い立ったのだろうか。あるふれっどは連盟の出口へと向かつて歩き始めた。

「ここに居ないならあーさーは外に決まってるんだぞ」

自信満々のあるふれっどだが歩き回ると迷子が悪化するのを分かっていない。そんな事を気にせず、に街を歩き始めたあるふれっど。ロアン育ちのあるふれっどが見た事の無い様な露店があちこちにある。彼が目を止めたのは子供用のおもちゃの鉄砲。ちなみに玉はゴム製です。

「……後であーさーに買って貰おう」

そう言って連盟入口付近の次の店を見ていた。しばらくその店を見て次に行こうと振り返ったら、大人にぶつかった。

「うわぁ！」

まだ小さなあるふれっどからすれば大人がちょっとぶつかっただけでも大きな衝撃に感じる。尻餅について何とかぶつかった相手を見る。中々愛嬌のある顔をしており、浅黒い肌に花柄のシャツがよく似合っていた。

「何だガキ。お前みたいな子供がここらをつろつくな」

あるふれっどが不機嫌そうな顔をする。どうやらガキとか子供とか言われてカチンときたらしい。

「俺はガキじゃないんだぞ！」

大人相手に果敢に言い返す。何だ何だと野次馬が集まってきた。ますます状況を悪くしているあるふれっど。

「どう見てもガキだろうが!!」

その大人の意見は正しい。普通、4、5歳の子供を見てガキじゃないと言う大人はいないだろう。

「うるさい！俺にはちゃんとあるふれっどって名前があるんだぞ！」

その時、人混みの中を掻き分けてくる人間がいた。黒髪に藍染めの和服の青年。背中には布に包まれた刀を背負っていた。

「おやおやアルフレッド君。こんな所に居ましたか」

誰だか分からなかったし、会った事もない青年だった。ただ分かるのはこの大人から助けしてくれると言う事だけ。

「お前、ホントにコイツの保護者か？」

訝しげに青年を見る大人。

「いえ。私の知り合いの子供ですよ」

「……なら、もっと礼儀を教える様に言っておけよ」

「分かりました」

そう大人に返して、青年に手を引かれて人混みから連れ出された。しばらく歩き続けると先程の鉄砲の露店近くを通った。

「あ……」

「どうかしましたか？」

あるふれっどが見つめる先にあるのはおもちゃの鉄砲。青年は苦笑して露店に行き、鉄砲と玉を買って渡してくれた。

「え？良いの？」

「良いですよ。それと……、お兄さんがとても探していましたよ？」

その言葉ではつと気がつく。そう言えばあーさーを探す為に部屋を出たのだ。何故か露店巡りになっていた。

「あーさーが？」

「はい。今は街を探していらっしゃるので今のうちに戻りましょう」

「……うん」

大人しく青年に手を引かれて連盟の中を歩く。次第に見覚えのある道に入り、一番最初の道に着いた。そして見えるのは出るときに見た表札。

「あの部屋だ！！」

青年を手を離して部屋の前へと走る。そして扉をゆっくり開けるとおろおろしているましゅーが居た。

「ましゅーだ！案内してくれてありがとう……」

振り返ったら、青年は居なかった。もう行ってしまったのだろうか。青年と居た証のおもちゃの鉄砲は手の中に残っていた。

「アルフレッド!!」

部屋にアーサーが飛び込んで来た。ましゅーが連絡してすぐ来る何てどれだけ足が速いのだろう。(↑実は転移魔術で来ただけ)

「あ……、アーサーだ」

「あ……、じゃねえよ！俺もましゅーも心配したんだ！」

あるふれつどに詰め寄って首根っこを掴んだ。足が床につかず、ぶら下がった状態のあるふれつど。

「あ、アーサーさん!？」

「今からパートナーを組む奴に会いに行くからコイツを押さえとくんだよ」

「あるふれつどなんだぞ!!」

訂正を入れるあるふれつどだがアーサーはまだ怒っているのか口調が雑だった。

「うるせえ！お前はちよつと反省しろ!!」

がみがみ叱りつけるあーさをどうしようと見るましゅーの目におもちゃの鉄砲が目についた。

「あれ、ある。そのおもちゃ、どうしたの？」

「これ？これはここまで連れてきてくれた人がくれたんだぞ」

はなせー！！と足をバタバタさせながら答えるあるふれつど。すると、

「アーサーさん」

扉の方から笑いを押し殺す様な声がした。

「菊か。悪いな、ここまで来させちまって……」

物静かそうな黒髪に藍染めの和服の青年が部屋に入って来た。

「いえ。私が勝手に来ただけですから」

あるふれつどは目の前に立つ青年に一人混乱中。

「え？うそ……」

「嘘ではありませんよ、アルフレッド君」

にっこり笑う青年。

「……知り合いなのか？」

あーさーが困惑した様に視線を漂わせているのであるふれつどが説明する。

「さっき案内してくれておもちゃを買ってくれた人だよ」

「そうなのか……って何ちゃっかりおもちゃ買って貰ってたよバカ!!」

弟がすまないと頭を下げるあーさー。それから話はただの世間話に移り、談笑する二人。その内にあーさーの手から逃れてましゅーの後ろに隠れる。ほっと一息ついたあるふれつどにましゅーが、

「ねえ、ある」

「何だい、ましゅー？」

「きくさん？って優しそうな人だね」

数秒間の沈黙が続いた後、

「……うん」

小さかったあるふれつどの大切な大切な思い出。

13 (後書き)

アルフレッド「……」

菊「おや、懐かしい物ですね」

アルフレッド「……ちなみにこれは宮原のリアル友達のリクエストなんだぞ」

菊「いやはや、時が流れるのは早いものです」

14 (前書き)

ア
ー
サ
ー
s
i
d
e

もうどれくらい時間が経ったのだろうか。ルートヴィッヒ達が助けを呼びに言つて、ここまで戻つて来るまで最低でも1日はかかる。ツンツンとした癖毛のある金髪が廊下に置かれた松明の炎と反射して光っている。ゆつたりとした魔術師用の長い濃緑色のローブ。若草色のシャツに黒いスラックスと魔術師にしては中々お洒落な物ばかりだった。アーサーはこの屋敷から何度も脱走を試みていたのだが、その度に数十匹の魔獣に叩きのめされて現在は牢に入れられている。体のあちこちに青アザが出来ているがどれも致命的な怪我では無い。それより、足を怪我したフェリシアーノは大丈夫だろうか。抵抗も脱走も高い確率でしないだろうが足の怪我は酷かった。魔獣は人間の様に高い知能は持っていないからご丁寧に手当てをしてくれる訳でも無いし……。例えしてくれてもそれはこの魔獣を率いた高い知能を持ったボスだろう。アーサーは深すぎる溜め息を吐く。

「まさに、万事休すだな……」

牢の壁に青アザが当たらない様に寄りかかり、天井を見つめる。エリーゼ、もしかしたら俺はピーターを置いて行ってしまうかもしれない。

―ガチャガチャッ！―

静かな廊下に牢の鍵が開く音がした。奥にいたアーサーは目を凝らして開けた人物を見る。ハニーブラウンの髪が見え、その下には少し薄い茶色の目が覗いている。白かったであろうシャツやベージュのスラックスは所々破け、赤く血で染まっていた。羽織っていた少し大きめの茶色とブラウンのパーカーはこちらもシャツに負けず劣らず破けていた。

「フェリ、シアーノ……」

牢の鍵を開けたのは、大分前に別れた仲間だった。怪我した筈の場所には治癒術でもかけられたのだろうか、傷は無かった。アーサーは痛む体を引きずる様にして、鍵を開けたフェリシアーノに近寄る。

「お前、無事だっ……」

トンツと軽い衝撃が全身に走り、急に腹の辺りに熱くなった。痛みを堪えてアーサーはそろそろと腹に手を当ててみる。ぬるっと粘り気がある赤い液体がとどめなく流れ続けている。

「フェリ……り、シ……アーノ？」

一体何を……と言おうとした。が、血が足りないのか足に力が入らずにずっと床に座り込んでしまう。見上げたフェリシアーノの手には牢に入れられるまで自分が持っていた海賊刀カッターが握られていた。その先端部分からは今も赤い液体が滴っている。あの優しくてヘタレなフェリシアーノが正気で人を刺せやしない。そう思い、力の入らない体を無理矢理起こして彼の瞳を見る。澄んでいたハニーブラウンの瞳は今は黒く濁り、フェリシアーノの自我は見当たらず、変わりに高位魔獣の姿が映っていた。完全に油断した。

「（アルフレッド……）」

アーサーは遠退いて行く意識の中で、二ヶ月前に喧嘩別れした末の弟の姿を思い浮かべた。ピーターはマシューに任してあるが、アルフレッドには誰もいない。アルフレッドの行き先に心当たりが無い訳では無いが、どうだろうか。ポツリポツリと浮かぶ思考はアーサーが意識を失うまで続いた。

14（後書き）

アルフレッド「アーサー以外いないじゃないか！」

菊「しかも名前を連呼……」

アーサー「勘違いされるような事言っうなバカッ……」

アルフレッド「まさにアーサー姫だね」

菊「確かに」

アーサー「納得するなよ……」

別荘は町から距離もあり、着くまでに魔獣達の妨害がかなり多かったが、別荘内には罾かと疑うくらいあつさり入る事が出来た。白く高い塀が張り巡らされ、何処か菊の家に似た雰囲気を持つ古い別荘だった。その別荘を見た瞬間、菊の顔色が変わったのは何故だろう。例えばアルフレッドが聞いたとしてもそうでしょうか？と笑って返されるのだろうから何も言えない。

「広くて複雑な構造をした別荘ですね」

菊が皆さん、迷子にならないでしょうかと先頭を歩くルートヴィッヒに尋ねる。

「別荘内の地図は依頼人から貰っている」

両手に持った別荘内の地図を菊に見せる。それを見たロヴィーノがボソツと言うには、

「前回その地図に頼りすぎて迷ったばかりだろーが……」

「いや。今度は大丈夫だ」

本田が居るからなと太鼓判を押すルートヴィッヒに、いきなり自分の名前を出された菊はぎょっとした様な顔をする。

「え、ちょっとルートヴィッヒさん!？」

両手を顔の前で振って無理ですと言う菊。マイペース兄のマシユーがそれに気づく筈もなく、

「菊さん、お願いします」

ペコリと頭を下げる。さらに追い詰められた菊にピーターも、

「頼んだですよ」

と言い出す。様子を見ていたルートヴィッヒが菊に地図を渡して先頭を譲る。地図を無理矢理渡された菊が近くを歩くアルフレッドにボソツと言った。

「……………皆さんはもっと老人を労るべきなんです」

「……………HEROの出番かい？」

「余計に迷いそうなので私がやりますよ」

アルフレッドの申し出をやりわりと断ると菊は地図を向きに合わせ、六人の先頭を歩き始める。

「まずは地下から回って見ましょうか」

大抵の別荘は地下に牢屋を作りますからと迷い無く道を進む菊。菊って本当に年長者何だなぁとアルフレッドがしみじみと感じた瞬間だった。

15（後書き）

菊「迷ってますね」

アルフレッド「そこは冷静に言っちゃ駄目だよ菊!!」

菊「大丈夫ですよアルフレッドさん。グー。ルで検索すれば……」
アルフレッド「いつの間に!?!」

『アーサー先生の分かる様な分からない様な魔術教室』

アーサー「今回は俺1人で解説しろと作者からのお達しだ。くそっ……、間が持たねえぜ」

魔術

アーサー「その名の通り魔術だ」

魔力

アーサー「魔術を使う為の力だ。個人差はあるが人よりエルフの方が数段高いな」

種類

アーサー「これは色々ある。まあ俺の使う魔術はだいたいの奴が使える。他の奴が使ってるのはその土地独自の言語で構成されているから他の土地の人間が使うのは難しいな」

表記

アーサー「これが。簡単に言えばピーター、アルフレッドはカタカナ表記。俺達は外国語表記だ。作者曰く、未熟から未熟じゃないかを一目で見分けて欲しいらしい」

属性

アーサー「基本は《火、水、風、地、光、闇》。そこから派生して《氷、治癒術》。聖属性は特別だ。ちなみにエルフはこれを見捨て魔術を使える」

治癒術

アーサー「簡単に言えば怪我を治すものだ。高度なものになると死んだものでさえ呼び戻せるらしい」

エクスシスト 被魔師

アーサー「調伏のスペシャリストだ。セリアには多く住んでいる」

陰陽師

アーサー「マルチな奴らだ。が、その数は少ない」

魔術師

アーサー「基本的かつ専門の魔術を使いこなす」

ヒーラー 治癒術士

アーサー「特定の素質がある奴だけが使える。ちなみにエルフは別だ」

ソーサラー 妖術師

アーサー「俺たち魔術師より攻撃的な魔術を使う。詠唱はほとんど
なのが特徴だ」

サモナー
召喚士

アーサー「読んで字のごとく、精霊を召喚する奴らだ。たまに例外
がいるがな」

ブリスト
神官

アーサー「これはもう血筋だな。特殊な魔術が使える」

固有魔術

アーサー「ほとんどの術士が持つてる物だ」

16 (後書き)

アーサー「アルフレッド達。何で来ないんだよ……」

アルフレッド「H A H A H A ! ! それは俺がH E R Oだからさ! !」

アーサー「黙れ」

アーサー・カーランド (Arthur Kirkland) 魔

術師

年齢：28だ

身長：175cm

武器：海賊刀 カッタラス

ロアン出身の青年で多分この物語で一番不憫。

弟にマシュー、アルフレッド、息子にピーターがいるがピーターとはとある理由により仲が悪い。

菊の元パートナー。現在は家の仕事を継いでいるため、暇なときだけ連盟で活動する。

妖精と仲がいいがアルフレッドや昔馴染は見えないため変人扱いされる。

妻が居たがとある事情により他界。ローブは妻から貰った。

アルフレッドが居なくなっときは自棄酒を飲んでいたためか、後にアルフレッドから『酔いどれ不憫紳士』とありがたくない名前をもらう。

『海賊紳士』や『元ヤン紳士』等と呼ばれていた時期もあり、幼少期は荒れていた。

ピーター・カーランド (Peter Kirkland) 見習い魔術師

年齢：10歳ですよ

身長：130cm

武器：ほあた の杖

ロアン出身のちよつと（かなり）暴走している少年。

父にアーサー、叔父にマシューとアルフレッドが居る。

が、アーサーとは仲が悪くよく野郎呼ばわりする。

まだ10歳だがその魔術の才能は父親似らしい。

フェリシアーノ・ヴァルガス（F e l i c i a n o V a r g a s）
？

年齢：21歳

身長：172cm

武器：白旗（仕込み刀入り）

セリアの町に住む連盟には所属している兄共々何をやっているのか
分らない青年。

事実、魔術と治癒術を使う。どちらかというと治癒術寄り。

両親はすでに他界しており、祖父はバイルシュミット家の祖父と世
界旅行中。

ルートヴィツヒは中学時代からの友達。

絵が得意らしく普段はアトリエで過ごすことも。

イム・ヨンス
任勇洙（i m y o n g s u）

年齢：50歳だぜ！

身長：？

武器：刀（反り身）

今回の依頼人。父が王耀^{ワンヤオ}で兄弟もいるが末っ子。
一章では最後の方に登場。辛い物が好きらしい。

菊の案内で別荘を歩き回り地下に繋がるであろう扉を見つけた。床と一体化したそれを持ち上げて開けるのは、一番年寄りで最近腰が危ない菊には勿論無理な事。持ち上げる事になったのはすぐ後ろに待機していたルートヴィツヒとアルフレッド。

「何か扉が湿ってるんだけど……」

扉を持ち上げるのつて、何か湿っているから嫌だなあ……と洩るアルフレッド。開けた瞬間にお化けが出るとでも思っているのかもしれない。まあ、RPGでは定番のパターンなので否定は出来ないが。

「それは俺も同じだ。我慢しろアルフレッド」

ルートヴィツヒに叱咤され、渋々定一につきせーの！で一気に横に動かす。扉を開けた瞬間にお化けが飛び出す事に無かった。が、かわりに噎せ返る様な血の臭いがした。

「う……」

真っ先に顔をしかめたのはパーティー最年少のピーター。マシユーがハンカチを渡し、ピーターはすぐにそれを鼻に当てるがやっぱり少しは残るらしくまだ顔をしかめている。地下へと続く階段にはポツポツと血の後が残されている。皆が後ずさる中、菊一人だけが階段を降り始める。

「え、菊!？」

アルフレッドが止めようと肩を掴むが簡単に振り払われた。えっ…
…と手を振り払った菊の目を見たアルフレッド。いつも穏やかな目が隠せない程の焦燥に駆られていた。そんな目で見つめられて何も言えなくなったアルフレッド達を置いて、菊は階段を走って降りていった。

18（後書き）

菊「ではっ……」

アルフレッド「あ、ちょっと菊。何処に行くんだい？」

菊「善処します」

老人の勘はよく当たる。菊はエルフの血族から見ればまだまだ若い。それでも人から見ればかなり、いや、化け物レベルまで生きている事になる。それまでも嫌な予感がし、それを無視すれば誰かが死ぬ。それを繰り返して来た菊だからこそその行動だ。別荘に入った時からじりじりと募る謎の焦燥感。長年の経験はアーサーかフェリシアーノの命が危ないと言う事を伝えているのだ。脇目も振らずに地下へと出てすぐの一本道を走る菊。もう少しで牢と言う所でアンデット系の魔獣が立ち塞がる。ただでさえこの地下は噓せ返る程の臭気に満たされているのだから出てくるなとは是非叫びたい。菊は走りながら腰に差した刀を抜き、続けざまに攻める魔獣を刀を一閃させて斬り伏せる。念のため、壁に魔獣の類いを弾く札を数枚張っておく。これでもし後ろから攻めようとした時は安全だ。張り終わってすぐに走り出す菊の脳裡に、先程置いて来たアルフレッド達の顔が浮かび上がる。果たして彼らは私を追ってくるだろうか。恐がりなメンバーが多いので、今一期待出来ない所が微妙だ。

「何だか、自分ではないのに不安になってきました……」

なら置いて行くなよ！――ともし誰かがここに居ればツツコミを入れただろうが生憎菊は今一人。誰もツツコミを入れてくれる人は居なかった。

菊さんがアルフレッドの手を振り払ってまで地下へ行ってしまった。アルフレッドは不安そうに地下へと続く階段を見つめ、

「き、菊が行っちゃったんだぞ……」

追いかけようとするがお化けが苦手なアルフレッドにはハードルが少し高いみたいだ。ルートヴィツヒもどうしようかと悩んでいるし、ロヴィーノ何かピーターと一緒に震えている。マシユーとしてはすぐに追いかけたいのだがパーティーがこの状態では行こうにも行けない。

「アル、暗い所が恐いのは分かるけど……行こう」

「マシユー……」

「あの菊さんが慌てて行っただよ？地下にアーサーさんかフェリシアーノさんが居るんだよ」

暗い所への恐怖感からかまだ迷った様な顔をしていたアルフレッド。すると、

「おおお俺は行くぞ、コノヤロー!!」

ジャガイモ野郎も行くぞとほぼ強制的に（ルートヴィツヒを盾にし

ながら）地下へと降りるロヴィーノ。ピーターもマシューの袖を掴みながら、

「ピ、ピー君だって行きますよ！」

その割にはマシューの袖をしっかりと掴んでいるピーター。マシューはそれに苦笑し、双子の弟を見る。自分から苦手な所に飛び込むのはとても勇気が要るものだ。アルはどうするのかなあと視線を当てると、

「HEROに怖いもの何て無いんだぞ！！」

青い顔をし、しっかりマシューを盾にしながら、勿論行くに決まってるじゃないか！と言うアルフレッド。そんな恐がりの弟と甥にまた苦笑しながら、マシューは二人と地下へ降りた。

20（後書き）

アルフレッド「H A H A H A！H E R Oに怖い物なんてあるはずないじゃないか！..」

マシュー「.....あ、あそこの壁に.....」

アルフレッド「ぎゃあああああ〜。O H、N o。S o、C r a z y！..」

マシュー「でも、シミが付いてるって言いたかったんだけどなあ。怖いんだね.....」

地下には真っ直ぐ行く道しか無く、牢がある部屋が続いているだけだった。少し進んだ所には菊が使う札が数枚張られ、魔獣を通さない強固な結界を作っている。

「菊の札だ……」

自分には読めない文字で様々な術式が組んである。これならそう簡単には破られないだろう。

「本田はこの奥か……」

道の先を見ると所々にアンデット系魔獣の死体が転がっている。そこから更に腐敗臭がすると言う、噁せ返るような血の臭いとのダブルパンチ。

「こ、こんなのあり得ねえだろ……」

これから出てくる魔獣がこう腐敗臭した物だと形振り構わず逃げたくなる。

「……菊はスゲーですよ」

「うん……」

逃げたくなる様なこの地下を一人で進んで行ったのだから。視界の隅で後ろで固まったままロヴィーノを引きずってでも動かそうと奮闘するルートヴィツヒが見える。どうやら恐くて固まってしまったらしい。

「マシュー。ここ、本当にパパが居る所ですか……」

ぴったりとマシューにくっついたまま言うピーターにアルフレッドもくっつかれていたマシューも驚いた。あのピーターがアーサーの事をパパと呼んだ。

「ねえアル。パパって聞いたの、何年ぶりだろう」

「何か、懐かしいね……」

懐かしさに浸る二人にピーターは自分が口を滑らした事に気づいたらしくすぐに、

「ち、違つですよ！別にアーサーの野郎何か……」

心配で心配で仕方がないのだろう。最初は大きかった否定の声はだんだんと小さくなっていった。その少し素直な様子にルートヴィツヒも固まりから治ったロヴィーノも顔を見合せている。アルフレッドは敢えて空気を読まず、ピーターの帽子を取って頭をぐしゃぐしゃと撫でる。

「い、痛いですよ！アルフレッド、何するですか……！」

ブチキれるピーターにH A H A H A！とだけ返しておく。自分の意図が分かったのかマシューが苦笑しながら自分の横腹を軽く小突

く。

「マシューも苦笑してないでアルフレッドへの仕返しを手伝うですよ！」

ピーターがそう叫んだ時に、通路の奥から菊の声がした。

「アーサーさん!？」

その焦りを含んだ声に皆一様に顔を見合せて通路の奥へと走る。しばらく走ると南京錠の壊された牢があり、その中に菊が居た。次いで視界にゆったりとした長い濃緑色のローブを着た自分がよく知る人物が入る。その濃緑色のローブは血でべっとり濡れていた。菊に支えられた人物は牢の外からも分かるくらい青ざめ、牢の付近には大量の血の後が。マシューが飛び込む様に牢に入り、ヒーリング・スベル治癒呪文をかけ始める。目の前の惨状にロヴィーノはすぐには動けないで居た。が、ピーターのアーサーを呼ぶ声で我に返った様に自分も牢の中に入り^{ヒーリング・スベル}治癒呪文をかける。ピーターは青ざめた顔のアーサーの手を握りながら、

「パパ!！」

と繰り返し叫んでいる。ルートヴィッヒは牢の入り口付近に立ち、魔獣が来ないか見張っていた。肝心のアルフレッドはアーサーの事は気になるが自分は何も出来ないからとルートヴィッヒの隣で見張りをし始めた。

「菊さん!アーサーさんの出血が止まりません!！」

「あ、くそ!止まれよ、コノヤロー!！」

ヒーリング・スペル

治癒呪文を必死にかけながら言うマシュー。同じく向かい側でも口
グイーノが似たような事を言っている。

「……それでは私もお手伝いしましょう」

21（後書き）

アルフレッド「やっと合流だね菊」

菊「はい。それと、お知らせです」

アルフレッド「HETAWORLDが4100、セリアが3100
を超えたんだぞ」

菊「皆様。本当に有り難うございます」

和服の袖を捲る菊にマシユー、ロヴィーノの顔がほぼ同時に驚愕に染まる。錬金術師アルケミストのアルフレッドも陰陽師ヒールが治癒術ヒールを使える何て初耳だ。

「ですが……、この事は連盟の皆さんにナイショですよ」

ロヴィーノが使うのは単体、全体治癒や状態回復。マシユーが使うのは治癒呪文全般ヒール。治癒術ヒールの主な特徴として術発動時に蒼い光を放つ。だが菊が使った治癒呪文ヒールでは碧い光が放たれた。マシユーでも扱いきれない高度な治癒呪文ヒールが、遙か昔に消滅した魔法ロストマジックだろう。数秒後、その光が消えた時には青ざめていたアーサーの顔が健康な色を取り戻している。

「後は目を覚ますのを待つだけです」

ピーターがほっと安堵の息を吐く。そんなピーターの頭をマシユーが優しく撫でる。ピーターの母親は数年前に他界している。だから血の繋がった家族は叔父の二人を除くと父親のアーサーだけだった。

「……アーサー、起きないね」

「大量に血を流していらっしやいましたから」

そろそろ意識が戻ってもいい頃なんですが……とアーサーを心配し

始める菊。そんな菊を見てアルフレッドは日頃の恨みを晴らす様に、

「くたばれアーサー!!」

ジャンピング肘鉄を喰らわせた。早く起きろと言っ意味合いもあったのだからきつと恨みを晴らす方が大きいに違いない。

「ア、アルフレッドさん!?!そんな事で起きる筈が……」

だが次の瞬間、

「ぐほっ!こんな事、で、俺が、くたばるか!!」

気管に詰まっていたらしい血をこぼこほと吐きながら言っアーサー。

「……………アーサーさん、肘鉄で起きちゃうんですね」

元パートナーはアルフレッド（愛する弟）の肘鉄で起きると心のメモに書き込む。しばらく咳き込んでいた（多分きつと肘鉄のせい）アーサーだったが、ふと周りを見回して、

「フェリシアーノは?」

「地下牢に居るかと思って来たらお前しか居なかったんだよチクチヨー!」

バカ弟は何処だよ!と詰め寄るロヴィーノの剣幕にやや押され気味のアーサー。大体アーサー自身も捕まっていたのだから居場所を知るはずが無いのだ。噛み付く様な勢いで言っロヴィーノをルートヴィッヒが窘める。それを見てアーサーがこっそり菊に耳打ち。普段

であればフェリシアーノがやる事らしい。ムスツと不満そうな顔を
しているロヴィーノを横目に、

「フェリシアーノさんは別の所に居るようですね」

「多分、そうだろうな」

「……立てます?」

当たり前の様に差し伸べられた菊の手をどこかぎこちなく取るアー
サー。ピーターも菊だけじゃ大変だろうからと協力していた。アー
サーの前では素直になれないみたいだ。

「……………アルフレッド」

立ってすぐに見えたのは二ヶ月前にアーサーの前から消えたもう一
人の弟。

「アーサー、その、」……」

アルフレッドが言おうとした事を手で制止し、

「お前が無事ならそれで良い」

アルフレッドの無事な姿を見て、心なしか安堵した様な表情のアー
サー。そして菊に向き直り、

「どうせアルフレッドの面倒を見てたのはお前だろ、菊」

「さあ?どうでしょう」

惚けた様に言う菊においつ！！とつつこむアーサー。さすが元パー
トナー同士、息がぴったりだ。ロヴィーノはさっきより三割増しの
不満顔で、

「フェリシアーノの居場所に心当たりはあるのかよ？」

「……俺達が最後に行った部屋だ」

「！？あそこは魔獣だらけじゃねえか！！」

要は困だろうなとアーサー。

「何でバカ弟を止めなかったんだよ！」

この眉毛野郎と叫ぶロヴィーノにアーサーは、

「……お前弟が絡むと性格変わるな。俺はすぐ牢行きだったからそ
んなの無理だ！」

「ざけんじゃ……」

「ロヴィーノ、お前は少し黙れ」

ルートヴィッヒに押さえられ、コノヤローと叫びながら牢の端へと
強制連行されるロヴィーノ。蚊帳の外に出されたピーター達は、

「マシユー。アーサーの野郎はすごく元気じゃないですか」

さっきまで死にかけてたのが嘘みたいですよとピーター。マシユー

は苦笑しながら、

「それはね、多分大人の事情だよ」

と返すマシユー。敢えて菊の治癒呪文ヒーリング・スペルのお陰だよとは言わないらしい。菊はカオスになってきた牢内で、

「では皆さん、そろそろフェリシアーノさんを助けに行きましょう」
逸れた話を戻す事にした。

22（後書き）

菊「本日の更新はここまでです」

アルフレッド「また来週更新する時はもう一つの方もするらしいぞ」

階段から地上を覗き、魔獣が居ないかを確認してから、ルートヴィッヒ、ロヴィーノ、ピーター、マシユー、アーサー、菊、アルフレッダの順で一気に出る。

「アーサーさん。先程言っていた部屋はどの辺りですか？」

屋敷内の地図をアーサーに見せながら菊は問う。ああと菊の持つ地図を見て、顔色が変わった。

「あの部屋、ここからかなり近いぞ」

え？と驚いた顔をする菊にここだと地図を指差して見せるアーサー。地下への階段があった部屋から廊下を通ってすぐ左に曲がればアーサーの言った部屋に着く。あまりに近すぎてアーサーが驚くのも分かる気がする。

「それってHEROの為の活躍チャンスかい？」

いつの間に銃を抜いていたのだろうか。菊から許可さえあれば真っ先に飛び出して行きそうな勢いである。

「何処をどうやったらそうなるんだよこのAKY!!」

「ん？何だいアーサー、アルカシュAKYって？」

敢えて空気を読まないアルフレッドに息子同様ブチキれるアーサー。
何かさらに大人気ない。

「誰がそつちの意味だって言ったんだよこのバカ！AKYに決まっ
てるだろ！！」
アルマらまめない

そしてこの二人に強烈な爆弾を落としたのは……、

ふたりをきめない
「WKYですよ」

ピーターだった。二人共お互いを指差しあつて、

「アーサー（アルフレッド）と一緒にするな！！」

だった。やっぱり元は同じなんだなあと感じさせる。が、まだ完全
に傷が治った訳では無いアーサーは、

「……っ！！」

大声何て出せば、当然痛みが反動として返ってくる。話していたア
ルフレッドが顔色を変えたのを見て今まで二人のやり取りを黙って
見ていたロヴィーノが適当な治癒術ヒールをかけてやる。

「？」

「お前が居ないとフェリシアーノを助けられないから仕方がなくだ
！」

二度は無いからな！とプイツと顔を背けてルートヴィッヒを引っ張
って（引きずる様に）先を歩く。

「菊さん」

「何でしょうか？」

「このパーティーって素直じゃない人が多いですね……」

意地っ張りなアルフレッドとピーター。不器用でシンデレルのアーサーとロヴィーノ。

「私は見てて飽きないから良いと思いますよ？」

「確かに、そうですね」

マシユーはそれで自分を納得させて、ピーターと先を歩き始める。菊はまだ辛そうなアーサーにもう一度治癒術をかけ、

「くれぐれもご無理はなさらないで下さい」

酷い傷でしたから完全に治癒しきれませんでしたと頂垂れる菊。アーサーは気にするなと言う風に軽く手を振って見せる。

「何かありましたら必ず私達に言って下さいね」

「……ああ」

アーサーはそれだけ返した。

23（後書き）

アルフレッド「あれ？今日の更新はここまでじゃなかったのかい？」
菊「時間があったから投稿したようですよ」
アルフレッド「ふん……」

アーサーが言っていた部屋は意外と広がったが……、魔獣一匹の姿も見られなかった。一匹も居ないじゃないかとアルフレッドからのじと目で見られる。

「一匹も、居ない、な……」

二メートル近くの鞭を構えたままのルートヴィッヒ。ずっとマシューにくつついたままだったピーターがそろそろと離れた時、

「……なっ！聖なる光よ、S a i n t ！！」

アーサーが突然光属性魔術を詠唱し、発動させる。手のひら大の光がピーターの近くの何かにぶつかり、爆発する。

「ぐるうううう……」

アンデット系魔獣が姿を現す。現れてすぐに腐敗臭が辺りを漂う。近くに居たピーターが後退りしながら、

「フ、ファイアですよー！！」

姿を現したアンデット系魔獣に指先に乗るほどの小さな炎の塊を投げつける。アンデット系魔獣は炎に弱い。咄嗟に炎を投げつけたのは、賢明な判断だろう。ピーターを襲ったアンデット系魔獣は瞬時に火がまわり、燃え尽きた。恐怖からかピーターはまたマシューに

くつつき、

「い、今のは、な、何だったですか！」

その質問は一番最初に気づいたアーサーではなく、菊に向けられていた。

「……高度な隠蔽魔術でしょうね」

「ハイド隠蔽魔術？」

「簡単に言えば、姿を隠す魔術ですよ」

つまりアーサーはピーターに近づく気配に気づいて魔術を放ったと言っ事だ。そしてこれが意味するのは、

「この部屋に居る奴は皆ハイド隠蔽魔術を使ってる可能性が高い」

この手の解呪文デイスベルを使う事が出来るマシユーが、

「僕じゃ一々解呪文デイスベルを使わないと解けませんよ……」

部屋の隅に集まり、どうしようかと考えている中、ロヴィーノの頭の中では行く前の光景が思い起こされていた。

『久しぶりにフィールドデイスベル広範囲解呪文を使いしましたがまだ鈍ってない様で良かったです』

「……フィールドデイスベル広範囲解呪文を使えば、いけるんじゃないか？」

菊はポーカーフェイスで表情一つ崩さなかったが、元パートナーのアーサーは、

「フィールドディスプレイ広範囲解呪文か……。何処でそんな言葉を知ったんだ？」

「本田が使ってるのを見た」

ただ、それだけだよと言うロヴィーノに菊のポーカーフェイスが珍しく崩れた。

「あれを見ていらっしやっただんですね」

全く気がつきませんでしたと菊。

「……今すぐ使えるか？」

アーサーの言葉に軽く頷いて見せる菊。

「はい。詠唱時間さえ稼いでくだされば」

につこりと笑う菊の顔にはアーサーへの絶対の信頼感が現れている。

「分かった。じゃあ、デカイのを一発落とすからその間に……」

「ア、アーサーはダメですよ！」

アーサーの言葉を遮ったのは……。ピーター。魔獣が恐くて掴んでいたマシューの服の袖から手を離し、

「病み上がりなのに上級魔術を使わせるなんてダメですよ！いくら

アーサーでも危ない……」

ぽんつとピーターの帽子の上に大きな手が乗せられ、よしよしと撫でられる。途中で言葉を遮られて何か言い返そうと顔を上げて見れば、苦笑した様なアーサーの顔が見えた。

「よし、菊。どれくらいのを落とせばいい？」

菊はアーサーのその姿に苦笑しながら、

「好きなので良いですよ」

「分かった」

後ろで詠唱を始める菊と反対にアーサーが魔術を発動する。ここからは何が来るか分からないからとロヴィーノは自動拳銃を、マシューは弓を構え、アルフレッドは銃に銀弾を詰めていた。ピーターはアーサーに撫でられた頭を片手で押さえながら皆を守る魔術の展開準備に移る。

「光よ、彼者を照らす希望となれ……、E s p e r a n c a!!」

大量の魔力で作られた巨大な光が部屋を中心に現れ、聖なる光が辺りを照らす。そこ周辺に居たらしいアンデット系魔獣達が次々と姿を現し、次の瞬間浄化され、消滅する。その間に菊は詠唱を終わらせる。

「……アーサーさん助かりました！では、フィールドデイスベル広範囲解呪文発動!!」

菊の周辺に現れたのは今では使われていない言語で何重にも重ねら

れた陣。それが歯車の様にカチリカチリと合わさって、一つの形を作り出す。陣が完成した瞬間、今まで隠蔽していた魔獣達が一気に現れる。隠蔽^{ハイド}魔術が解かれ、一様に動揺した魔獣達。それに合わせ、ルートヴィツヒの鞭が雷光を帯び、ロヴィーノの銃弾から泡が弾け、マシューの限界まで絞られた弓が風を起こす。アルフレッドがふらついたアーサーを片手で受け止めながらもう片方の手で銃の引き金を引く。ピーターは自分が使える魔術の中で最も高い防御力持つ術を詠唱。

「全てを防げ、守護の盾！！」
フリント・プロテクト

瞬時に不可視の盾が形成され、魔獣の攻撃を防ぐ。魔獣vs菊達の乱戦が始まった。

24（後書き）

菊「アルフレッドさん、アルフレッドさん！」

アルフレッド「どうしたんだい菊？」

菊「5日で観覧者数が4100越えました！！」

アルフレッド「え……。ホントかい！？」

菊「作者が何回も確認しましたから」

アルフレッド「そんな事ってあるんだね」

菊「まあ色々あつて人生ですから」

一匹一匹の能力はそれほど高く無い。先程の隠蔽^{ハイド}魔術もこの魔獣達のボスがかけた物なのだろう、アルフレッドに支えられながらアーサーはそう考えていた。この病み上がりの体で上級魔術を使う……、我ながら何てバカなのだろう。

バイレーツ
「海賊か……」

小さな呟きはアーサーを支えられながら銃の引き金を引き続けるアルフレッドには聞こえなかったらしい。昔、自分がやんちゃしていた時の呼び名。その自分がまさか息子に心配される様な魔術の使い方をするとは……。

「アルフレッド」

「ん？何だいアーサー！」

これはアーサーに出来る最後の賭けだ。失敗は、許されない。

「俺がアイツらを吹っ飛ばす魔術を使う。だから……」

「俺らは適当な所で下がって？君そんなに顔色が悪いのに大丈夫かい？」

アルフレッド
魔獣を撃ちながら聞く弟に、

「心配には及ばない。菊！」

フィールドデイスベル
広範囲解呪文を使った後、アルフレッドの撃ち逃した魔獣を斬っていた菊。魔獣の攻撃を飛んで避けると同時にアーサーの近くへと着地する。

「何でしょうか？」

「連携行くぞ」

菊は覚えているだろうか。パートナーを解消する5年前に作った連携技を。

「あれ、ですか？」

どうやら菊は覚えていてくれたらしい。

「ああ。あれだ」

「……まあ、状況が状況ですからやりましょうか」

アーサーと菊が同時に前に上がり、そこにマシューとロヴィーノが入れ代わる様に入る。ピーターがもう一度フィールドプロテクトをかけ直し、さらに防御を固める。準備が整うまで前衛のアルフレッド、ルートヴィッヒの負担が増えない様に中衛のマシューとロヴィーノが援護数を増やす。ピーターも自分の限界と話し合いながら強力な魔術を放つ。

「水面に映る満月は……」

アーサーが使ったのは水系統上級の魔術。

「闇夜を照らす光なり！」

水系統魔術は菊の持った刀に纏われ、淡い光を放つ。

「こうふうせいげつ光風霽月！！」

振り払われた刀の一閃は魔獣を斬り払い、殲滅する。だが、

「アーサーがカッコ悪すぎだよ！」

アルフレッドに笑われてアーサーはちょっと落ち込み気味のその時だった。メキメキと天井から嫌な音がし……、

「ルート、助けてー！！」

先程操られていたばかりの白旗を持ったフェリシアーノと焦げ茶色にぴょんと一房の髪が出た15、16歳くらいの少年。白と青を基調として、袖は少し長めの深衣に身を包み、片手には刀を持ったままだった。

「誰か助けるんだぜ！！」

と自己主張するが誰も助ける気すら無く、フェリシアーノはロヴェイノにキャッチ（完全に受け止めきれずに潰れた）され、少年はほっとかれた。

「無事だったんだな！」

「うん！勇洙ヨンスが助けてくれたんだよ！！」

誰だ、それ？と首を傾げるルートヴィッヒに先程ほつとかれた少年を指差す。痛いんだぜ！と落ちた時に打ったらしい腰を押さえて叫んでいる。

「勇洙ヨンスって……依頼人じゃないか！」

「ヴェ？」

あれ、そうだっけ？と逆にフェリシアーノが首を傾げる。ロヴィーノを押し潰したままの状態はとつてもシユール。

「そうだぜ！依頼人なんだぜ！」

だから普通は助けるだろ！と主張するが、

「バカみたいに落ちた勇洙ヨンスさんが悪いので気にしないで下さい」

さりげなく酷い事を言い、勇洙ヨンスを冷たく一瞥した菊。元パートナーのアーサーでさえ、あの様な菊は見た事が無い。

「え、あ……。菊なんだぜ！！」

藍染めの和服の菊を指差して、ぽかんと数秒間停止。

「どうしてここに居るんです。王ワシさんなら来る時に連絡一つは絶対寄越しますよ」

「う……。でもその代わりにフェリシアーノとこのボスを倒したんだぜ！」

なっ！とフェリシアーノに確認を取るが、ロヴィーノを介抱している為か全く聞いていない。

「まあ、貴方なら倒せるでしょうね」

そう言って深い溜め息を吐く菊。

「？何でだい、菊」

「勇洙ヨンスさんの父親の王耀ワンヤオさんは商人でもあり鍊丹術師れんたんじゅつしです」

鍊丹術？王耀ワンヤオ？と首を傾げるアルフレッドをアーサーは適当な物陰に強制連行。

「何するんだい！」

と抗議する弟に溜め息を吐いて見せ、

「鍊丹術れんたんじゅつとは仙人術とも呼ばれ、鍊金術とは違い大地の気を利用する」

「だから何だい？」

「つまり、あのガキは父親の影響で魔獣の気の流れの読み方を知っているから倒せたんだよ！！」

分かったかバカ！と頭一つ分程大きい弟の頭を叩く。アルフレッド

はマシユーにぶつぶつ文句を言いながら、一樣確認の為にフェリシアーノと上の階に行く。今のフェリシアーノからは魔獣の気すら感じられない。まずはそこに安堵し、慣れない戦闘でばてている息子見る。マシユーに文句を言う元氣はあるらしく、服が汚れた等々言っている。菊と言えば勇洙ヨンスと言っ少年にひたすら説教しているし、ルートヴィッヒは愛用の鞭を拭いている。

「（考えたらこんなメンバーでよくここまで来れたよな……）」

規律に厳しいルートヴィッヒ、ルートヴィッヒ嫌いのロヴィーノ、おおらか過ぎるマシユー、暴走気味のピーター、ゴイングマイウェイのアルフレッドに空気を読む菊。何がどうやったらこんな事になるんだと思案し始めたアーサーの耳に歡喜の声が聞こえる。

『Wow！ホントに倒したんだね！！』

『凄いでしょ？』

上の階でワイワイ騒ぐ二人の声を聞いて、勇洙ヨンスが上に行こうとする。そして、

「早くしないと置いていきますよ」

菊は行こうとした勇洙ヨンスを無理矢理止め、二人を呼び戻す事にした。

25 (後書き)

アルフレッド「ここまで長かったね」
菊「はい」

* Epilogue *

あの後、上に居た二人を呼び戻して町に戻りました。ここで今回の報酬を頂いたのですが、アーサーさんが「アルフレッドとしばらく居たい」と珍しく素直に言われて滞在する事に。勇^{ヨンス}洙さんはどうやら王^{クニ}さん達と紛争ではぐれてしまった為にこちらに來た様です。皆さんが予想した様に「しばらくここに居るんだぜ！」と高らかに宣言して、ここセリアで露店をしています。フェリシアーノさんとは中々お話が合ったので今度からフェリシアーノ君と呼ぶことになりました。何故かロヴィーノ君が「お前何か嫌いだ！」と泣きながら言っていました。その後、八つ当たりをされるらしいルートヴィッヒさんはきつと大変でしょうね。マシューさんはシロクマ育成場があるから戻る事になりました。そこにピーター君が、「アーサーの野郎と一緒に嫌ですよ！」とマシューさんにくつついて帰る事に。マシューさんの言った通り、素直じゃない方々が多いですね。……私ですか？私は人数が増え、騒がしくなつた我が家の縁側でのんびりお茶を頂いていますよ。今日も良い月が見られそうです。では、この章はここで終わり。また次の章でお会いしましょう。

* Epilogue * (後書き)

何とか一章、完結です。

この5日間一章のセリアを読み直してさらに加筆+書かれていない出来事を別sideで書いていたら凄い事に……。

今日中にその外伝的なものを上げていきます。

そして二章の最初までいけるはず……。

この5日で宮原の予想を超える程の方々がセリアを見に来てくれたようです。

ありがとうございました。

おまけの詰め合わせでございませう

『真偽は？』

別荘から出てからアーサーとはある事が気になっていた。

「フェリシアーノ」

「ん？何、アーサー？」

ルートヴィッヒとの会話を適当な所で打ち切って、駆け寄って来る。仲の良い二人の会話を打ち切った事に少し罪悪感がよぎるが敢えて無視する。

「お前は何処に捕まってた？」

「俺？俺は普通にアーサー達の居た上の部屋の隣で普通に縛られてたよ」

アイツらいきなり俺の姿に変身してさ、びっくりしたよと笑うフェリシアーノに何か笑えないアーサー。

「……………そうか」

それだけ返すのが精一杯だった。

sideフェリシアーノ&勇洙^{ヨンス}

焦げ茶色にぴよんと一房の髪が出た15、16歳くらいの少年が二階から屋敷へと忍び込んだ。二階へと降り立った姿は白と青を基調として、袖は少し長めの深衣に身を包み、片手には少し反り身の刀を持っていた。

「ふう。潜入成功なんだぜ……」

まだその衣服は長いらしく余った袖で勇洙^{ヨンス}は無い汗を拭う。本人は潜入と称しているがただ表で暴れまわって安全そうな二階に逃げ込んだだけである。そんな事を気にせずに屋敷内を歩き回る。するとある一室からそろりと青年が出てきた。ハニーブラウンの髪が見え、その下には少し薄い茶色の目が覗いている。おそらく白かったのであろうシャツやベージュのスラックスは所々破け、赤く血で染まっている。羽織っている少し大きめの茶色とブラウンのパーカーはこちらもシャツに負けず劣らず破けていた。その様子はまるで一戦やらかした様な出で立ちだった。

「お、おい、お前誰だぜ？」

気づいた青年が振り返り、

「ヴェ？お前こそ誰？」

声からして意外とのほほんとしているらしい。

「俺は勇洙ヨンスだぜ！」

「勇洙ヨンスか……。俺はフェリシアーノ！」

よろしくね〜と握手を求めるフェリシアーノ。最初は魔獣かと疑ったがどうみてもこの青年は違った。

「で、何でフェリシアーノはここに？」

「確かこの階に魔獣の親玉が居るんだ〜」

探すだけでもしたかったんだけど怪我の治療に時間かかってね〜とフェリシアーノ。……コイツ、どうみてもヘタレなのに一人で親玉探しかよ。仲間はいないのか？

「俺もそのつもりなんだぜ！だから手伝ってやるんだぜ！」

「ホント？やったあ〜！！」

そうして、勇洙ヨンスとフェリシアーノの親玉探しが始まった。

まさかフェリシアーノの出してきた部屋の隣に親玉が居る何て全くの予想外だった。下の階でも戦闘が行われているらしく、床が揺れている。そして問題の親玉は一匹でそこに居た、居たのだが……。

クレイジーウルフ
「狂った狼……」

約2メートル程の灰色の体躯に鋭い爪と牙。アンデット系で一番面倒で厄介だと言われる魔獣がそこにいた。狂った狼の爪、クレイジーウルフ牙には毒があり、その体を覆う毛皮は鉄より硬いと聞く。

「ルート達と来た時はまだ雑魚がたくさんいたんだけど……」

捕まってる間にルート達が来てくれたから減ったのかな？とフェリシアーノ。……捕まってたんだな。そうこうしている間に、

「ぶぐるうううう……」

クレイジーウルフ
狂った狼は低い声をあげる。アンデット系と言うだけあってやつぱり腐敗臭が凄い。一戦するならばそれなりの覚悟が必要かもしれない。

「……フェリシアーノは何の術士だ？」

「い、一樣、ソーサラー妖術士と治癒術士だよ。後はいくつか固有魔術が……」

「分かったんだぜ」

それだけ聞ければ十分だ。もしフェリシアーノが術士出なければ勝てない相手。なら俺がやる事は……、

「時間は稼ぐからその間に魔術をぶつけるんだぜ！」

命懸けの足止めだ。勿論自分はあるの菊と父にしごかれただけあってそれなりの実力はあると感じている。がしかし、同時に経験が浅い事も感じていた。

「任せてよ！」

勇洙^{ヨンス}達二人の狂った狼^{クレイジーウルフ}との戦いの火蓋が切たて落とされた。

「P r e g h i e r a（祈り）！」

十数回にも及ぶ神聖な光が勇洙^{ヨンス}の体を包み、光の盾となる。治療術の結果だ。これで数回の狂った狼^{クレイジー・ウルフ}の攻撃には耐えられるだろう。それを気にも止めずに少しでも毛皮が薄い所に刀を叩き込む。既に戦闘が始まって10分になるが中々倒せない。フェリシアーノは援護、攻撃共によくやってくれていると思う。だが、

「それだけじゃ、完全に押しきれないんだぜ……」

親玉と言っただけあってかなりの体力、実力を持っているのだ。事実、（フェリシアーノが悪い訳ではないが）術士一人の援護ではやはり心許ない。

「……っ！」

狂った狼クレイジーウルフの長い爪が髪を数本切る。はらりと舞う髪を見て舌打ちし、また別の角度から狙う。その時だった。バケツをぶちまけた様な高い魔力の高まりを感じた。電撃に撃たれた様に動かなくなる狂った狼クレイジーウルフ。いや違う、あまりの魔力の大きさに脅え、動けなくなったのだ。詠唱しているのはフェリシアーノ。確か彼は妖術士。詠唱が無い事が特徴の妖術士が詠唱何て……。そう勇洙ヨンスが考えている内にフェリシアーノの詠唱が完了した。

「……Giustizia（裁き）！」

導き出されたのは聖なる光。狂った狼クレイジーウルフの足元から光の奔流が貫き、同様の光が横からまた貫く。まるで十字架ロザリオを描くように光は舞い続ける。勇洙ヨンスの記憶に間違えがなければ……、

「神官プリーストの固有魔術……」

浄化を得意とする神官の術ならば確実に狂った狼クレイジーウルフを屠る事が出来る、きっとフェリシアーノはそう判断したのだろう。その予想通り狂った狼クレイジーウルフは動かなくなったが念のために刀を心臓の辺りを狙ってに刺す。……1、2、3、よし、動かない。

「勇洙ヨンス、大丈夫？……ってうわぁ!？」

魔術の衝撃だろうか、部屋の床が抜けた。ここは父が建てた別荘な

のだ。会ったら叱られる事間違いなし。狂った狼を倒して上がった
気持ちが一瞬で憂鬱な気持ちに落とされた勇洙ヨンスだった。

『暗中恐怖』

まだ8歳くらいの子供達が本田邸の庭で遊んでいた。一人はくすんだ金髪に深い青みがかかった蒼い目、くると一本髪が飛び出していた。子供用の白シャツに薄い茶色の上衣、長めのズボンと人形を持ったとても穏和そうな少年。一方、もう一人の少年は金髪に同じく髪が飛び出ているがこちらはぴょんと言った感じた。少年と同じく蒼い澄んだ綺麗な目をしていた。それに子供用の白シャツにベージュの上衣、黒く丈の短いズボンを穿いた快活な印象が持てる少年。二人は広い庭で鬼ごっこをしていた。と言っても庭だと確実に転ぶ為、石畳の上限定でだが。

「アルフレッド、マシュー。遊ぶのは良いが怪我するなよ」

そんな二人を見て、縁側から声をかける青年。家族なのだろうか。こちらの青年はツンツンした金髪だった。魔術師用の長い紺色のローブ。白いシャツに黒いスラックスとその出で立ちほぼ黒一色で黒魔術師の様にしか見えない。そのアーサーの呼び掛けに対してアルフレッドは、

「やなこつた〜！」

と言いながら追いかけて来るマシユーをさらに引き離す。そのアルフレッドの返答にあからさまにアーサーがぴきりと怒りのマーク浮かべる。が、それを隣でお茶を飲んでいたこの家の主がやんわりと止める。

「菊？」

「アルフレッド君はまだ子供ですから」

それより……、とアーサーを誘導する菊。

「エリーゼさんとはどうですか？」

菊に勧められるままに出されたお茶を飲んでいたアーサーが突然吹き出す。

「おやおや……」

タオル、要りますか？とお盆に茶器と乗せていたタオルを差し出す菊。ごほごほと咳き込みながら菊の差し出すタオルで濡れた服を拭く。

「な、何でそれを菊が知ってるんだよ！！」

しれっとした風の菊に聞く。

「ああ、アルフレッド君が教えに来てくれましたよ。それはそれは

可愛いデート写真付きで」

「アイツ……」

怒りで拳を震わせるアーサーを叩きに行こうとしてアルフレッドの姿を探すが見当たらない。するとマシューが泣きながら現れた。

「アーサーさん。アルが……」

話を聞いていくことに二人の目つきが変わっていった。

「アーサー、早く助けに来ないかな……」

最初は好奇心で除いた深い穴。まさかマシューが転んで自分の背を押してしまうなんて考えてもいなかった。とにかく助けを呼んで欲しいとマシューに言ったものの行ってしまうと心細い。深く暗い穴には外からの光があまり差し込むことはない。暗いところが苦手なアルフレッドからすればいち早く抜け出したいわけで……。

「アルフレッド……!」

聞き慣れた声の上から降ってきた。

「アーサー?」

そう問いかける。が、

「菊、何でこんな所に穴があるんだよ！」

「あ、たぶん緊急脱出用の通路かと……」

「いつの時代の物だよ!!」

その後、何とか二人に救出されたアルフレッドだったが、暗いところが昔にも増して駄目になったのは言うまでも無かった。そして現在の19歳では、

「Oh、Nooooooooooooooo~~~~!!」

「電気を消したくらいで泣き叫ばないで下さい……」

全く克服できていなかった。

おまけの詰め合わせでございます（後書き）

アルフレッド「フェリシアーノ達、こんな事を……」

菊「でも王^マさんの屋敷を壊すとは恐ろしい事をしますね」

アルフレッド「助かったならいいじゃないか！」

菊「そうですね（笑）」

* Prologue *

鉦山の一角で7、8歳くらいの子供達が遊んでいた。

「お腹すいたな、フェリシアーノ」

「僕もだよエリック。じゃあ……、帰ったらお菓子作ってあげるから二人で食べよう」

「そうだな。頼むよフェリシアーノ」

少年はにつこり笑って言った。だが、その約束が果たされる事はなかった。

「おい、アルフレッド！昔から好き嫌いはダメだって言ってるだろーが！！」

パンにマーマイトを塗りながら言うアーサー。何故彼はあんな不味い物をパンに塗っているのだろうか。

「せっかく家出してアーサーの不味い料理から逃れられたのにこころでもまたかい!？」

冗談じゃないよ!と叫ぶアルフレッドにやや傷ついた表情のアーサー。

「不味い言っなよバカァ!」

なら塗ってやるよとアルフレッドのパンに無理矢理塗りつける。ベツトリ、しかも大盛りで。

「何するんだい!!」

菊が焼いてくれたパンが台無しじゃないか!とブチキレてアーサーと取っ組み合いになったアルフレッドに勇洙は溜め息を吐く。

「菊は毎日大変だぜ……」

アルフレッド達の為に毎朝パンを焼き、自分や勇洙の為にご飯を炊く。奴等はその苦勞を知っているのだろうか。そんな喧騒の中、一人で塩じゃけや漬物をつつく菊。この二人の喧嘩には慣れっこな様子だ。

(俺や??^{ババ}達が訪れてなかった10年で一体菊に何があったんだ?)

勇洙はそう考えながら、

「菊、ご飯お代わりなんだぜ!」

いつもの様に二杯目をお代わり。菊は勿論苦笑しながらついてくれ

る。そして取っ組み合いは佳境へ。

「この超飯マズ紳士!!」

「メタボなHEROに言われなく無い!」

勇洙はここに来て数十回目の取っ組み合いを見ながら静かにご飯を食べた。

*** Prologue * (後書き)**

菊「新章突入です」

アルフレッド「終わったと思った人、まだまだHEROの活躍は終わらないんだぞ！」

目の前の畳をゴロゴロと背の高い青年が転がって行く。暇過ぎなんだぞ〜と言いながら転がるアルフレッド。あの依頼が終わってから依頼された物は、『猫探し』や『恋占い』等。体を動かす事が好きなアルフレッドからすれば確かに退屈だっただろう。最も、菊はこの様な依頼は腰に響かないので結構助かるのだが。ちなみに彼が堂々と仕事をサボタージユしていられるのは保護者^{アーサー}が酒に酔って寝ているから。

「アルフレッドさん、今日はよく転がりますね」

「だってアーサーが来ないんだよ？これを楽しまずして何時楽しむんだい？」

そしてまたゴロゴロと転がる。かなりの間転がっているがアルフレッドは目が回らないのだろうか。

「アルフレッドさんは錬金術師^{アルケミスト}なんですから何か錬成してみてもどうですか？」

アルフレッドの転がっていた体が一時停止する。そして、

「……素材が無いんだよ」

素材があつたら何でも良いから錬成してるんだぞ！とアーサーが寝

ている部屋をさりげなく、心配そうに見るアルフレッド。素直にアーサーが心配なら心配と言えば良いのにと思っただけで口に出さない菊。そう言えば、アーサーが来てからアルフレッドは錬成の練習ばかりさせられていた気がする。

『べ、別に、お前の為じゃないからな！お前が錬成が下手くそだと俺が困るから、それだけだ！！』

ええ、それはもうアーサーさん、ツンデレ全開でしたとも。あの後自分は何て言っただろうか。……忘れたかもしれない。食事内容なら細かく思い出せるのに。

「じゃあ菊。素材を取りに行こう！」

「……何処に？」

何時も無計画なのでここは一樣聞いておくべきだろう。

「西の鉱山さ。この町の錬金術師は皆そこで素材を取るって聞いたぞ」

一体誰からそんな事を聞いたのでしょうか。自信たっぷりに言うアルフレッドさんに内心溜め息を吐く。

「……二人で、ですか？」

「いや。確かそろそろ来るはず何だけどなあ……」

取り敢えず二人で無い事には安心しました。やっぱり腰が心配なので。その時、

『おゝい。菊、アルフレッド――!!』

玄関の方からのんびりとした声が聞こえてきた。アルフレッドが素早く立ち上がり、玄関に向かって走って行く。おそらく、この声の持ち主は……。

「遅いじゃないかフェリシアーノ!!」

アーサーが寝ているのを気遣ったのか声のボリュームを落としてフェリシアーノと話している。

「ごめんよアルフレッド。ちょっと可愛い女の子をナンパしててさ……」

寝て無いののに照れた様に頭をかくフェリシアーノ。

「え、またナンパかい!? じゃなくて……、今から鉱山に行くけど君も行かない?」

「うん。それは良いけど、どうして鉱山に行くの?」

何かあるの? と首を傾げるフェリシアーノにアルフレッドは、

「菊。説明は君に任せた」

説明を菊に丸投げした。仕方がなくフェリシアーノに分かる様に説明する菊。

「……アルフレッドさんが鉱山で錬金術の素材を採りたいそうです」

今さらですがこの二人、何時仲良くなっただんでしょうか。とても気になります。そんな菊の内心を知らずに話を進める二人。

「あ、そっか。アルフレッドは錬金術師だったね」
アルケミスト

納得したよとぼんと手を叩いたフェリシアーノに、

「思い出した様に言わないでくれよ!!」

「あ、うん、ごめんね。ちなみに俺は妖術師兼治療師だよ」
ソーサラー ヒーラー

……このメンバーで鉦山に行って本当に大丈夫でしょうか。前衛の私に思い切り負担がかかる気がしてなりません……。杞憂で終わって欲しい菊だった。

01（後書き）

アルフレッド「俺はメタボじゃないんだぞ!!」

菊「いきなりどうされましたか？」

アルフレッド「アーサーがメタボだつて言うんだ。そりゃあハンバーガーを20個、シェイク10本、みたらし団子を……」

菊「みたらし団子は私のおやつだった覚えがあるのは気のせいでしょうがアルフレッドさん？」

アルフレッド「……Sorry!」

菊「待ちなさい!!」

西の鉱山。セリアからそう離れていない為、ここに素材を採りに来る錬金術師アルケミストも多い。上を見上げると茶色い岩肌が見える。フェリシアノは鉱山に入って五分で疲れたよ」と言い始める。アルフレッドもそれにつられて埃っぽい所はHEROには似合わない！と主張。これはアルフレッドの素材探しなのについてのか菊一人で探しているのは何故だろうか。

「菊は真面目だね」

頑張っ〜と何処からか白旗を取り出して振り始めるフェリシアノ。

「フェリシアノも探すの手伝ってくれよ……」

休憩を終了し、菊と鉱石探しを始めたアルフレッド。相手は鉱石なので厚手の手袋を着用し、ヘッドライトを付けている。

「だってさ、入ってすぐに魔物が出たんだよ？この鉱山は魔物が出ない事で有名なのになあ……」

近くあった岩に座って休憩を続行中のフェリシアノ。彼は手伝いの意味を分かっているのでしょうか？

「錬金術仲間のトニーもそんな事言って無かったな」

もしかして……と理由を予想してしまった菊。人の話を聞かないし、アルケミスト錬金術師集会にも行かないアルフレッドの事だ。高確率でそうだろう。

「アルフレッドさん。それは一体何時の情報ですか？」

「ん？一ヶ月前だけど？」

鉱石を探す手を思わず止めてしまった菊にそれがどうしたんだい菊？と悪気なく聞いてくるアルフレッド。なんでそんなに情報が古いんですか！と怒鳴りたくなるが年長者の自制心により、何とか踏みとどまる。アルケミスト錬金術師集会に出ない事がこんな所で仇となるなんて……。その情報が古いならば、

「……アルフレッドさん」

「何だい菊？」

澄んだ青空を切り取った様な目には純粹に疑問の色が浮かんでいる。

「今すぐ町に戻りましょう」

「えー！やっとここまで来たのに……」

勿体無いよと抗議の声を上げたフェリシアノ。アルフレッドはただ菊を見て、

「……分かったよ」

「え、アルフレッド!？」

「菊は俺達より経験豊富だから安心して信用出来るよ」

まだ少し不満そうなフェリシアーノだったが言い出しっぺのアルフレッドの言葉にこくりと頷く。

「なるべく早くここから出ましょう。……何か嫌な予感がしますから」

「菊」。縁起でも無い事言わないでよ」

俺、恐いのダメなんだよと周りを見回し始めたフェリシアーノ。

「何だいフェリシアーノ。臆病だな」

HEROの俺には怖い物何て無いんだぞ　と強がっているが菊の和服をこっそり掴んでいる。アルフレッドは昔から怖い時にはそうする癖がある。

(アルフレッドさんとはかく、フェリシアーノ君は何故恐がりなのになこういう仕事をなさっているのでしょうか?)

そこが不思議でたまらない。まあ、今はとにかく、

「逃げますよ」

ここから立ち去る事にした。

02（後書き）

菊「突然ですが次からシリアス突入です！」
アルフレッド「早すぎるよ菊！！」

崩れた岩影に隠れる様にフェリシアーノとアルフレッドは座り込んでいた。上からは時折パラパラと砂が落ちてくるだけ。菊と撤退中に突然床が崩れ、アルフレッドはとっさに受け身をとろうと身構えたが何時までたっても衝撃は襲ってこなかった。それはまだ7、8歳の短く切った金髪の子供が保護呪文プロテクトスベルを使ってくれたからだった。その蒼い目に似合う貴族の子弟の着る上等な絹の服を着た少年はアルフレッド達が無事に地面に足を着けたのを見届けると、すっと消えてしまった。床が崩れた地点で気絶していたフェリシアーノが見たら、絶対パニックになる。実際アルフレッドも彼を見てパニックになりそうになった。助けてくれた彼の体は……、薄く透けていた。つまり生きている人では無く、幽霊。こういう時にメガネが壊れていれば良いのと思う。

「これからどうしよう……」

ここって多分鉱山の奥の部屋だよと不安そうにフェリシアーノが聞く。菊が焦って帰ろうと言った理由を今さらながら痛感する。

「菊は上に居るから誰か助けを呼んで来るんじゃないか？」

「そうだよな。たださ……、ここって多くない？」

青い顔で岩影からそっと覗くと体の透けた方々がたくさんいる。

「俺はメガネを外したから全く見えないんだぞ！」

恐いからメガネを外したアルフレッド。HEROでもやっぱり恐い物は恐いと開き直った結果だ。

「あ、ずるいよアルフレッド〜！」

青い顔ながら冗談を言うフェリシアーノ。そう言えば彼は何故この様な仕事をしているのだろう。見た所のフェリシアーノは自分と負けず劣らずの恐がりだ。

「なあフェリシアーノ。フェリシアーノは何でこんな仕事をしているんだい？」

急に黙ったフェリシアーノを見て、ぶしつけな質問だったかもしれないと思うアルフレッド。様々な理由でこの仕事に就く者が居るのだから聞いてはいけないと菊に言われていた。でも、何故だか気になった。彼が俺と同じ恐がりだからだろうか。考え込むアルフレッドの耳にフェリシアーノの静かな声がした。

「子供の時、親が死んでからはじいちゃんが仕事をして面倒を見てくれたんだ。でも、長期の仕事の時は知り合いの家に預けられてた。そこですごく仲の良かった子が居たんだ。でも……、俺のせいで死んじゃったらしい。俺はその子の事を全く覚えてないから償いの為になるのかな〜」

ちなみに兄ちゃん俺に付き合ってくれてただけだよとロヴィーノの事まで教えてくれた。フェリシアーノなりに理由があったんだと思ひ、同時に酷い事聞いたなと思う。それをアルフレッドの横顔で見たのだろうか。

「あんまり気にしないでいいよ。アルフレッドが暗いとか俺まで暗い気持ちになっちゃうよ」

慌てて手を振り、気にしないでと言うフェリシアーノに少し無理してるなと感じる。彼の振った手は少し震えていた。ならさっき助けてくれた少年が彼の傍に居るのは……。

「その子って金髪で貴族っぽくて蒼い目をしてないかい？」

「？写真にはそう写ってたけど何で？」

言うべきか、言うべきでないか。言い方次第ではフェリシアーノを傷つけてしまう。

（菊が居てくれたらなあ……）

いつも何も言わずに相談に乗ってくれる菊と離れてしまっただけこんなとは今まで思わなかった。はあと溜め息を吐いてメガネを掛ける。メガネを通して見える少年はフェリシアーノを隣で見守っているだけ。と言うよりさっき助けてくれたから害は全く無い気がする。

（菊、早く助けに来てくれよ）

この幽霊だらけの空間から逃げ出したいアルフレッドだった。

03（後書き）

菊「私は何処でしょう？」

アルフレッド「え？え？居ないのかい？」

菊「それは次回のお楽しみです」

何故あの時手を伸ばせなかったのか。まだ自分の中にはあの思いがくすぶっているからか、それとも……。

（考えた所で無駄でしょうね。今は助けを呼びに行くべきです）

岩の上を駆けながら思う菊。アルフレッド達の前であればこんな事無茶な方法は使わない。菊がここまでするのは全て緊急時だからだ。大分進んだ所で入り口が見えた。さっさと抜けて助けを呼ばないとアルフレッドさん達が危ない。が、

「うわっ!？」

「わっ!？」

まさか人が居ると思っていなかった菊は入り口付近に居た人に気づかなかった。まず見えたのはツンツンとした癖毛のある金髪。そのお次にはゆったりとした魔術師用の長い濃緑色のローブ。若草色のシャツに枯れ草色のスラックスと元パートナーの姿だった。

「アーサーさん!？」

驚く菊にアーサーは不機嫌そうに顔をひそめると、

「アルフレッドに最近かけておいた探知魔術で追いかけて来たんだ

よ」

な、何か文句あるのかよ！と顔を赤く染めながら言うアーサー。家出したアルフレッドさんがやっぱり心配だったんですね。

「理由はどうあれ助かりました。この奥でアルフレッドさん達の下に落ちてしまつて……」

「マジかよ！！」

こうちゃいられねえ！と突入しようするアーサー。菊は大慌ての元パートナーの足を簡易な捕縛魔術で引つ掛ける。引つ掛けられたアーサーはすぐに菊に捕獲された。

「何しやがる！」

自分に食つて掛かるアーサーに素が出てますよと思いながら、

「この道は焦つてしていると転びやすいので、まずはアーサーさんに落ち着いていただこうと思ひまして」

「うつ……。悪かつた」

弟や息子の事になると毎回こうなりますね……。毎回必死に止める私の身にもなつて下さい。

「とにかく、落ち着いて行きましょう」

「分かつた。……それよりお前、腰は大丈夫なのか？」

心配そうに聞き、すぐさま「別にお前の為じゃないからな、お前が動けなくなったら困る。そ、それだけだからな!!」と訂正を入れるアーサーに菊は、

「今すぐ死にそうです」

そうにつこり笑って言った。

04（後書き）

アルフレッド「君、腰は大丈夫かい？」

菊「大丈夫にしたかったら今すぐ上がってきて下さいね？」

アルフレッド「それこそ無理だよ！！」

見張り交代をし、フェリシアーノが寝息をたて始めたのを見計らって助けてくれた少年に話しかける。

「君は何でフェリシアーノを見守っているんだい？」

少年はアルフレッドが自分を見えていると思っていなかったらしく、とても驚いた顔をした。そして、

『フェリシアーノの隣は春のように暖かくて居心地が良かったから』

懐かそうに言う少年にホントに死んでるんだなあと思うアルフレッド。フェリシアーノは俺より少し歳上だからこの子も精神的には歳上なのか……。何か複雑なアルフレッド。

「な、名前を聞いて良いかい？」

じやないと不便なんだと言うと、ためらいがちに、

『……エリック。エリック・バイルシュミット』

「バイルシュミットって……ルートヴィッヒ達の所か」

言われてみれば、髪の色や目の色が似ている気がする。

『アイツは元気？』

「フェリシアーノ達をムキムキに鍛えるくらい元気さ」

日々ルートヴィッヒに追いかけて回されて毎回菊の家に逃げて来るフェリシアーノとロヴィーノ。振り切って逃げてくるその逃げ足はある意味尊敬出来る。

『ルートヴィッヒか。昔はあんなに病弱だったのにな……』

「あんなにムキムキなのに!？」

『人は見た目によらないよ』

やっと表情が綻んだエリック。幽霊にも色々あるんだと一つ学習。幽霊は見つけたら基本的に冥界へ送る。が、彼の場合は害所か助けてくれた。

「まあ……良いか」

ホントはいけない事を軽く考えるアルフレッドだった。

05（後書き）

菊「作者の話によるとエリックのあの台詞は友人からのリクエストだそうです」

アルフレッド「暇人だけに挿入が早いってことかい？」

菊「暇人は失礼ですよ。作者も一樣学生ですから。後、アクセス数がいつのまにか6000越えしました」

アルフレッド「wow！」

菊「明日も更新の予定です」

周りを通り過ぎて行く幽霊達を見ながらアーサーは前を歩く菊に話しかける。

「なあ菊」

「何でしょうか？」

菊は十三年前、ここで起きた事件を覚えているだろうか。有名な被^{エウ}魔師^{ソシスト}の子供が行方不明になり、未だに遺体すら見つかっていないと言う事を。

「エリック・バイルシュミットを覚えてるか？」

「ルートヴィッヒさんとギルベルトさんの弟ですね。確かルートヴィッヒさんより一歳下の子でしたね。もし生きていたらっしやれば20歳でしたっけ？」

その方がどうかありませんでしたか？と聞く菊に言おうとしたがちよつと声がかすれてしまった。

「もう少ししたら当時行方不明になった場所なんだよ」

「……あのすみませんが」

いきなり顔色が悪くなった菊。何か思い出した事でもあったのだろうか。

「アルフレッドさん達が落ちたのはその辺りです」

い、今菊は何て言った。アルフレッド達がそこから落ちたって？ ちよっと冗談は止めてくれよ。当時あの付近での搜索は打ち切られたくらい岩盤が薄く、いつ崩れてもおかしくないのに。そこから落ちて無事な確率なんてどれだけ低い事か。

「……こつちも色々で覚悟が必要だな」

「アルフレッドさん達の無事を祈ります」

菊も同じ事を考えていたのだろうか。アルフレッド達を避難させようとした所で崩落が起きたらしい。責任感が人一倍強い菊だから悩んでないといいんだが……。

「アーサーさん？」

「……さっさとアルフレッド達を助けて帰ろうぜ。ここは幽霊が多いからな」

そこに込められた意味を読み取ったのか苦笑する菊。

「では、早く参りましょうか」

覚悟を決めて、二人はまた走り出した。

06（後書き）

菊「こ、腰が……」

アーサー「……街に戻ってやりたいのは山々なんだが」

アルフレッド「なんだいアーサー！HEROを置いてけぼりかい！
」

菊「お前どっから出てきたんだよ……」

無事らしいアルフレッド達の姿を視界に認めながら、

「……私達まで落ちるとは思いませんでしたね」

まさかちよつと乗っただけで崩れて落ちる何て菊でも予想外だった。よく鉱石採取中は崩れなかったなと思う所だ。

「まあ、俺が転移^{テレポート}魔術を使えば問題無いだろ」

「問題あるよ。その転移魔術^{テレポート}で俺達の所まで来ればよかったじゃないか！」

そしたら幽霊に囲まれた二時間を過ごさずにすんだんだぞと主張するアルフレッド。よっぽど幽霊が恐かったらしい。フェリシアーノが至つてのんびりしていたから恐怖が緩和されていたのかもしれない。

「俺も幽霊恐かったよ」

菊達が来てくれて助かったよと笑うフェリシアーノ。そう言われて照れて顔を赤くするアーサー。……アーサーさん、何を照れているのですか。

「君は途中から寝てたじゃないか！俺なんてエリックと話す以外暇

を潰せ無かったんだぞー!!」

エリックってあのエリックですか？アーサーも同じ考えに到達したらしく、こちらを見た。

「え？エリックって誰？」

分かっていないらしいフェリシアーノが何処、何処と探しながら言う。貴方のすぐ隣です、こう言ったら怒られるでしょうか。

「ん？ああ。何でも十三年くらい前に幽霊に変身したらしくてさ、さっきまで適当な世間話で盛り上がってたんだよ」

「幽霊に変身！？」

そ、そうだったんだねと真に受けたらしいフェリシアーノ。すると、

『信じるなよフェリシアーノ（汗）』

アルフレッドの中では会話が成立しているみたいだが、フェリシアーノはエリックの姿や声すら聞こえて無いらしい。

「幽霊は死んだらなるんですよ」

と一様訂正しておく菊。フェリシアーノの事だ。これからあった幽霊に片っ端から聞いていくに違いない。

「なんだ。変身したならカッコイイのになあ……」

「カッコイイとかそういう問題じゃないだろー!!」

大体なあとアーサーが二人に説教を浴びせている。よほど心配だったのだろう。菊はその間にエリックに話しかける。

「貴方は、エリック・バイルシュミットじゃないですか？」

『……うん』

「なぜこんな所に居るのですか？」

エリックは辛そうに目を伏せると、

『俺はここで死んだんだ。フェリシアーノと家に帰ったら一緒にお菓子食べようって言ってたのに……、俺は帰れなかった』

フェリシアーノ君とはお知り合いなのですか？と聞きたいがエリックの言葉を遮る訳にはいかない。自分は彼に辛い事を聞いているのだから。

「……崩落事故ですか？」

『親父が俺とフェリシアーノを鉱山に連れてきてくれたんだ。二人で遊んでいたら急に床が無くなった。とっさにフェリシアーノを突き飛ばして……』

話すエリックの声が少しずつ小さくなっていく。辛い事ならなおさら言いたくないだろう。

「それで貴方だけ、ですか？」

『……。その後、フェリシアーノは崩落事故の事や俺の事を忘れた。親父達も色々配慮してくれたみたいだ』

俺について以上だと言うエリックは何処か寂しそうだ。やっぱり大事な人が自分の事を覚えていないのはやはり堪えるものだ。

「すみません。ぶしつけな事を聞いてしまつて……」

説教をしていたアーサーが目配せする。それに大きく頷き返して見せる菊。

「はあ、説教長いよアーサー。……それでさ、エリックはこれからどうするんだい？」

フェリシアーノが見えていない事を分かっていながら空気を読まないアルフレッド。

「おい、アルフレッド!!」

「だってこのまま一人は寂しいだろ!!」

アーサーはエリックにこのまま一人で居ろつて言うのかい!!?と大きな声で叫んだアルフレッド。近くを通る幽霊達も迷惑そうにこちらを見る。こういう所が何か人間くさい。

「なつ!!?んな事言つてねえよ!!」

言い争う二人をフェリシアーノが指差しながら、

「ねえ菊。エリックって誰？」

さつきも聞いたんだけど無視されちゃったよ、しゅんとなるフェリシアーノ。

「ルートヴィッヒさんの弟ですよ」

エリックはそのばらばらな会話を聞きながら、

『……俺抜きで会話が成立するんだ』

何か悲しい気分だった。すると、

「へえ、なるほど。懐かしいなあ……」

「……フェリ、シアーノ君？」

彼はエリックの事を覚えていないはずだ。なのに、なぜ？

「え、何？」

いきなり言われて驚いたらしい。彼のくるんとした癖毛がびくりと揺れた。

「エリックさんの事を覚えているのですか？」

「ルートとギルベルトから聞いたぐらいだよ」

それがどうしたの？と聞くフェリシアーノに少し違和感を感じながら何でもありませんと答える。もしかしたらフェリシアーノは忘れただりをしている？少し様子を見る必要がありそうだ。菊はアルフ

レッドの加勢に入ったフェリシアーノを一抹の不安と共に見た。それは何の曇りの無い笑顔に見えた。

07+ (後書き)

アルフレッド「二章は新登場人物が少ないから後書きで紹介なんだぞ!」

菊「しかし、やっとアルフレッドさん達と合流できました」

アルフレッド「そういえばそうだね。後書きで話してたから全く気づかなかったよ」

エリック・バイルシュミット (Erik Beilschmidt)
見習い被^{エクソシスト}魔師

年齢：見た目は7歳だが精神年齢は20歳

身長：？

武器：？

西の鉱山で出会った謎の幽霊少年。

ルートヴィッヒの事を知っていることから彼の知り合いらしい事が分かる。

フェリシアーノのピンチには必ず駆けつける。

トニー

年齢：？

身長：？

武器：？

色々不明なアルフレッドの友人。

体灰色だし、ファッキンしか言わない。

ちなみに話を通じるのはアルフレッドだけ。

見渡す限りの岩岩……。落ちた所を歩き回ってみればそれほど広い訳では無かった。転移魔術テレポートを使わずに脱出は無理そうだ。

「アーサー。さっさと転移魔術テレポートでセリアまで飛ばしてくれよ」

ここは埃っぽくて嫌なんだぞ！と愚痴を言うアルフレッドをスルースキルでほっておく。アルフレッドをなだめているフェリシアーノを観察中の菊の様子を聞く。

「どうだ？」

「エリックさんが近くで見て下さってますから何かあれば知らせてくれるはずです」

DDDD〜！と叫ぶアルフレッドを落ち着いてよ〜となだめるフェリシアーノ。菊が聞いた様な事を感じさせる仕草は一切無い。アーサーは長年の付き合いからか菊は嘘をつくような奴ではない事は分かっている。

「そうか……。俺もフェリシアーノを見る様に妖精さんに頼んでみる」

「お願いします。私はアルフレッドさんをなだめてきますので……」

軽く頭を下げてアルフレッドをなだめに向かった菊を黙って見送る。その内に妖精さん呼び出して事の顛末を話し、フェリシアーノを見る様に頼む。

『ほかならぬアーサーの頼みだから引き受けるわ』

（助かる）

良いわと優しく言う妖精さん。やっぱり頼りになる。

『でもあのフェリシアーノって子、アーサーが言う通り何か隠してる感じがするわね……』

（何だと！？）

自分ではそんな気配すら感じられない。妖精さんは人の本質を見抜くのに長けているから分かるのだろうか。

『でもアーサー達に仇なす様なものじゃ無いみたい。いわゆる無意識的なものかもしれないわね』

（……。また何かあったら頼むよ）

『分かったわ』

パチリッ！と一抹燐光を残して消えた妖精さん。姿を消してフェリシアーノの近くに行ってみたんだ。妖精さんも嘘はつかない。なら……、フェリシアーノはエリックの事を忘れたふりをしているのだろうか。だがフェリシアーノも仕事で何度も一緒になったから分かるが悪い奴じゃなかった。

（あー、こんがらがってきたー!!）

柄にもなく頭を抱えたアーサーにアルフレッドは何気なく爆弾を落としました。

「なんだいアーサー。また二日酔いかい？」

アルフレッドからすればアーサー「酔いどれ不憫紳士。アルフレッドの頭の中でそういう式がたっていると知らないアーサーは、

「んな訳ねえだろバカッ!!」

いつも通り、怒り任せに怒鳴った。

08（後書き）

アルフレッド「HERO参上!!」

アーサー「何処をどうやったらそこにたどり着くんだよ!!」

起句「大人の事情です」

アーサーがセリアに転移する為の魔術を詠唱している。複雑な形をした古代文字が周囲を舞い、それと共に詠唱は少しずつ完成していく。

「……なあフェリシアーノ」

何か面白い物が落ちていないか地面を探していたフェリシアーノに聞く。

「ん？何アルフレッド」

「君はここにたくさんいる幽霊が恐くないのかい？」

ちなみに今こんな話をしている時でさえ幽霊達はアルフレッドにちょっかいをかけています。

「凄く恐いけど……、別にちょっかいだしてくるだけなら良いんじゃないかな」

「えゝ！？俺は恐いから嫌だよ」

触られただけで背筋が凍るよ菊ゝ！といきなりバグを求めるが、

「甘いです」

さっと身を翻し、避けられてしまった。が、敵はそれだけではない。

「隙あり、ハグー！」

「う、うわあっ！？ちよ、ちょっと止めて下さいー！」

「よし、俺もなんだぞー！」

ガシッとアルフレッドとフェリシアノにくっつかれて赤面する菊。何か菊の反応が新鮮でおもしろい。

「おい魔術完成したって……、何やってんだお前らー！」

別にアーサーには関係ない事だったけどハブられたと思ったらしい。等とアルフレッドは考えていたが、本当はアーサー、ハグされて硬直した菊を見て言っていた。

「えつとね……ハグだよー」

「んなの見りゃ分かるよ！びっくりして菊が硬直してんだろーが！
！」

完全に硬直した菊は無言を貫いている。

「あ……、ホントだねー」

全然気づかなかったよーとフェリシアノ。アルフレッドも、

「こんなの世界の常識なんだぞ^{スタンダード}」

「それはお前らの一般常識だろ!!」

いきなりブチキレたアーサーにDDDDDD!!と応じるアルフレッド。

「何か凄い事になってるね」

菊のハグを止めて二人の様子を見守るフェリシアーノ。何だか楽しそうだった。が、菊だけが不安そうに辺りを見回している。

「どうかしたの菊?あれ、アルフレッド達も?」

突然喧嘩を止めた二人を見て何かあったんだと推測したらしい。フェリシアーノのその推測は見事に当たっていた。

『お前ら早く逃げろ!!』

それを言っただけでエリックの姿が視界から消えた。幽霊が消える、つまりエリックが具現化出来ないと言う事は何かが起こっているという意味だ。先程菊が周りを見回したのは周囲に居たはずの幽霊達が一斉に姿を消したからだ。次いで遠くから重い地響きが聞こえてきた。

「ヴェー!?!」

フェリシアーノが驚いて叫ぶのも分かる気がする。そいつは……、天井に届くくらいのもので、通常の不死者^{ゾンビ}は人と対して変わらない身長だ。ここまで大きくなった理由は一つしか思い当たらない。この鉱山で事故死した者達だ。

「H A H A H A……。冗談はよしてくれよ……」

ただでさえ俺は幽霊はダメなのにこんなまで来たら何時まで耐えられるか。

「エリックが警告してくれただけ良かったな菊」

何でこの二人は平気なんだろう。やっぱり最近仕事を始めたばかりの俺には理解出来ない。

「そうですね。アルフレッドさん、不^{ソレ}死者は調伏してしまえば問題はありませんよ。しかも銀弾がよく効きますよ」

「ホントかい!!」

「はい。試し撃ちには良いのでしょうか?」

そうだ。相手が不^{ソレ}死者だからって恐がっていても仕方がない。それにこれだけ大きいのであれば外す自信は無い。

「よし!アーサーも菊もフェリシアーノも皆俺の援護なんだぞ!」

「すぐに調子に乗るなよ!!」

アーサーのどうでもいいツツコミ何て完全スルーさ。菊に言われて不^{ソレ}死者をただの的だと思い始めてから何だか調子がいい。この時、アルフレッドはフェリシアーノの雰囲気の変化に気づかなかった。

「治癒術ヒーリングと簡単な魔術は任せてよ」

「ああ！任せたんだぞ！！」

菊が無言で背中に背負った日本刀を抜き、アーサーが長い濃緑色のローブから金に赤の水晶のついた折り畳み式の杖を展開。フェリシアーノが持っていた白旗を強く持ち直す。その白旗……、武器だっただね。そしてアルフレッドが腰のホルダーから愛銃をくるくると器用に回しながら不死者ゾンビへと構え、引き金トリガーを低く。瞬時に撃ち出した銀弾ゾンビが不死者の表皮をえぐった。

09（後書き）

フェリシアーノ「初めて後書きに来たよ」

菊「おめでとうございます」

アルフレッド「DDDDDD〜!」

フェリシアーノ「……大変だね、菊」

菊「わかってくれて嬉しいです」

不死者の攻撃は単純なものがほとんどだった。体が大きいだけあって動きも鈍く、タイミングさえ間違えなければ攻撃を避ける事が出来る。

「……Luna(月)！」

淡く白い光がフェリシアーノの手から放たれ、不死者に当たると光は月の形を描く。当たった場所を狙って菊が日本刀を一閃、表皮がパツクリと割れ紫の血がぼたぼたと地面に落ちる。

「菊、何かコイツしつこいんだぞ！」

銀弾を撃って詠唱途中のアーサーとフェリシアーノから不死者を遠ざける。

「それだけ鉱山での死者が多いという事ですよ」

前の方からとんぼ返りしてきた菊が言う。アーサーの魔術の詠唱が終わったのを感じたからだ。

「そう言う事だ、アルフレッド。……喰らえ、旋風、Whirlwind
ind！」

不死者の足元から渦巻く風。不可視の無数の刃が次々と体をえぐり、

切り刻む。おまけに銀弾もプレゼント。

「よし、これくら……」「ヴェー!?」「フェリシアーノ!?」

先程風の魔術で切り刻んだ不死者^{ゾンビ}がいきなり二つに分裂したのだ。運が悪く分裂した不死者^{ゾンビ}の近くに居たのはフェリシアーノ。分裂したとは言え、それなりに大きい。それから逃げようにも距離が二メートルほどではいくら相手が鈍くても避けきれない。

「逃げる、フェリシアーノ!!」

だが既に不死者^{ゾンビ}はフェリシアーノに攻撃を与えられる範囲内に居る。真っ直ぐとフェリシアーノに降り下ろされる不死者^{ゾンビ}の手。その瞬間、信じられない光景が見えた。今まで持っていただけの長い白旗の柄を少し捻る。そこから現れたのは聖属性の光を灯した白刃の刃。そして白旗から抜いた刃を不死者^{ゾンビ}へと一閃。聖属性の刃に斬られればもはや修復は不可能。反撃に出た不死者^{ゾンビ}の攻撃をひらりひらりと軽くかわして見せる。

「……あれは、本当にフェリシアーノかい？」

「らしいな。アルフレッド、たまには援護してやれ。こっちは俺と菊で片づけといてやるよ。……か、勘違いするなよ。コイツが居たら危ない、それだけだからな!」

妙なツンデレを発揮した後にそれで良いかと聞くアーサー。菊は不死者^{ゾンビ}に向けて日本刀を構えて見せる事で答えを返す。ベテラン二人の戦闘はそこから始まった。

『アーサー先生の分かる様な分からない様な魔術教室2』

アーサー「何だよ。まだ続くのかよこれ」

アルフレッドの術技

アーサー「アイツは魔術なんて使えねえよ。ほとんど銃に頼りっぱなしだ」

菊の術技

アーサー「菊は術も日本刀も使って攻撃してくる。

正直敵に回したら勝てない。Lv・1でLv・100に挑んでるよ
うなもんだぜ。」

ルートヴィッヒの術技

アーサー「鞭でしばいて来るぞ。術も使うがどちらかというと物理
メインだ」

ロヴィーノの術技

アーサー「自動拳銃ひたすら乱射だな。
ブリースト

神官の術技、魔術、治癒まで使うがまあ魔術が得意な奴だ」

フェリシアーノの術技

アーサー「ヘタレ。つか何でアイツは白旗もってんだよ。
神官フリーストの術技、妖術、治癒を使うが兄と違って神官フリーストの術技や治癒術が得意だ」

マシユーの術技

アーサー「弓で狙い撃ちしてくる。そして術のほとんどが治癒呪文。付与魔術もそこそこ使える」

ピーターの術技

アーサー「ほあたの杖で敵に勝てるか！今のところは補助呪文と簡単な攻撃魔術が使える」

勇洙ヨンスの術技

アーサー「まだコイツの術技は見たことないがおそらく気の流れ読んでくるはずだ。
刀を持つてるとややこしいな」

10+
(後書き)

アーサー「誰でもいいから来いよ……」

アルフレッド「君、妖精が見えるんじゃないのかい？」

アーサー「居るよ。お前の頭の上にな!!」

アルフレッド「Noooooooooo!!」

ちなみにアルフレッドは……、

「HEROが援護するんだぞ！」

一方的に不死者^{ゾンビ}を仕込み刀で斬りつけるフェリシアーノにはアルフレッドの言葉は全く聞こえていない。

「HEROの言葉を見捨てる何てあり得ないんだぞ！」

今度は遠慮なく（鼓膜が破れるくらい）大声で言ってみた。すると不死者^{ゾンビ}の攻撃を避けると同時にアルフレッドの隣まで戻って来て、

「ヴェー……、ごめんアルフレッド。ちょっと集中してて聞いてなかったよ」

「良いさ。それより、HEROが援護するよ」

かつこよく決まるように親指を立てて見せる。それに比べ、逆に困った様な顔をするフェリシアーノ。

「え、もうアルフレッドの銀弾だけで倒せるよ？」

「ホントかい！？それならHEROは活躍するんだぞ！」

途中で銀弾が無くならない様に数個追加で詰めておく。

「じゃあ俺はアイツの動きを止めるね」

仕込み刀に白旗が付いた方を被せる。なるほど、そちらが鞘になっているのか。仕組みに納得するアルフレッド。そう言えばフェリシアーノが詠唱をしている所を見た事が無いな、どうしてだろう……。そう考えている内にフェリシアーノが魔術を完成させた。

「Vento（風）！！」

吹き上がって動きを拘束する風。アーサーのWhirlwind（旋風）と違い、表皮を切り裂く魔術では無いのでグロテスクな物は見ずに済みそうだ。

「アルフレッド！」

不死者^{ゾンビ}を風で拘束したままフェリシアーノが叫ぶ。

「任されたんだぞ！喰らえHEROのカッコイイ技を、フレイムガンナー！！」

引き金^{トリガー}を引き、撃ち出された銀弾。魔銃の力で瞬時に炎属性が付与され、赤く燃え上がった。不死者^{ゾンビ}の弱点属性は、聖属性と炎属性。フェリシアーノの聖属性付与の刀にアルフレッドの炎属性付与の銀弾。これだけあれば不死者^{ゾンビ}を倒すには申し分ない。焼け崩れた不死者^{ゾンビ}をそこら辺にあった木の棒でつつくが反応は無い。

「フェリシアーノ」

「何、アルフレッド？」

「君、調伏出来るかい？」

え？と呆気に取られた様な顔をしたフェリシアーノ。そして、

「ごめん。俺、兄ちゃんと二人でしか出来ないよ」

「……………そっか」

菊達^{ソレヒ}が不死者を倒し終わるまでこの生物と同じ空間に居るのか……。そう考えただけで気が重いし帰りたい。

「なあフェリシアーノ。これって完全に燃やせないかな？」

「そんなのやった事無いよ」

大体そう言う類いの奴は^{エクソシスト}被魔師のルートの方が向いてるからねと答えてくれた。それがいつもフェリシアーノ達の役割らしい。

「菊達、遅いね」

何かあったのかな？と立ち上がったフェリシアーノを見て思い付いた。

「よし、今すぐHEROが助けに行こうじゃないか！」

「え……………もう一回戦うの！？」

「反対意見は全面的に認めないぞ」

ほぼ強制的に菊達の所に行く事にした。不死者^{ゾンビ}と三人きりなんて冗談じゃない。それに……、

（さつきからフェリシアーノは何を警戒してるんだろう？）

アルフレッドの話に笑いながら何処か警戒をしているフェリシアーノ。

（アーサーだったら妖精さん？で分かるんだけどなあ……）

生憎今のアルフレッドの技量では幽霊が見える程度しか出来ない。いや、別に見たい訳じゃあ無い。

（……何かややこしくなってきたんだぞ）

ややこしくしたのはアルフレッド自身だが彼はそれに気づきもしない。

「うわあっ……、アルフレッド！」

「へ？何だい？」

「不死者^{ゾンビ}はいないけど、菊が腰を押さえてうずくまってる」

「何だって!？」

ベテラン二人なら俺達より先に倒せて当然だったのだが、逆に菊の腰が戦闘不能に。

「しっかりしろよ菊！」

「アーサーさん、体をゆさぶらないで下さいよ。腰に響きます……」

ベテランの筈なんだけど……、何か違うと思うアルフレッドだった。

11
(後書き)

アルフレッド「最近更新速度が上がってないかい」

菊「しばらく家族がテストなので更新できなくなるから、だそうです」

アルフレッド「へえ……」

フェリシアーノ「へえ……、じゃないよ！俺たちしばらく出てこれないんだよ！！」

菊「そうですね」

アルフレッド「HEROの出番は最後にあるのさ」

フェリシアーノ「えええええええ！」

アーサーが魔術でもう一体の不死者^{ゾンビ}をアルフレッド達から離れた場所へと誘導する。菊自身としてはこんな異様な雰囲気^{ソニー}の空間からは早く出たかった。ただアーサー達が居るからこそ留まっているにすぎない。そう未だに考えている自分に苦笑する。

（私は何年経とうが全く考え方を変えませんね……）

アルフレッド達から大分離れた場所へと誘導し終わると戻ってきたアーサーが後ろで愛刀を抜く。長い間使い込まれているのか柄に彫られた三つの十字を象った紋章が削れていた。反り身で刃が短めの刀、海賊刀^{カットラス}。彼がやんちゃをしていた頃からの相棒らしい。菊も日本刀を中段に構えた。

「菊、聖属性付与の準備は？」

牽制^{けんせい}の為に聖属性^{インスタントマジック}の即時発動魔術^{ゾンビ}を不死者に投げてやるアーサー。先程の様な分裂はさせないと言う意味も含んでいるらしい。

「はい。出ていますよ」

「じゃあ、そろそろ始めるか」

「分かりました。聖なる加護よ、……Holy veil!!」

聖属性の証である白い光がアーサーと菊の刀に付与された。刀身が白く輝き、よく手入れされた刃を照らす。二人同時に別の方向から攻める。そして別々の所から要所、要所を潰していく。二人に合図などはいらない。菊の攻撃が当たりそうになればアーサーが無言で下がり、逆にアーサーの攻撃が当たりそうになれば菊が下がる。アイコンタクトだけで交わされる二人の会話。当たり前の様で高度な技術が伴う連携。お互いの絶対の信頼がなければその場で実現不可能となる。

（最もアーサーさんはその辺りをよく考えて下さいます）

日本刀を引き、奥義を出すために少しだけ後ろに下がる。それをつこうとした不死者^{ゾンビ}にアーサーの海賊刀^{カットラス}が襲いかかる。絶妙なタイミングで行われる完璧な連携^{パーフェクトコンビネーション}。アーサーの剣技により不死者^{ゾンビ}が菊の奥義の射程距離に入るのを待つ。

「雪月華！！」

雪を纏った日本刀は三日月の軌跡を描きながら間髪^{かんはつ}を容れずに不死者^{ゾンビ}へ。聖属性と氷属性が合わさった混合奥義。雪が動きを鈍らせ、後から聖属性付与済みの日本刀と三日月の軌跡が不死者^{ゾンビ}を襲う。畳み掛ける様にアーサーも聖属性魔術を発動。

「光線よ、Ray！」

幾筋もの光線が菊が作った弱点^{ポイント}を寸分狂わず貫く。体の内側から焼かれ、苦悶の表情（確かではない）を作る不死者^{ゾンビ}。この隙を逃さずに菊が調伏してしまう。跡形もなく消え失せた不死者^{ゾンビ}。一息ついてアーサーも愛刀を仕舞う。

「呆気ないもんだ」

消えた不死者^{ゾンビ}。ただの純粋な思いが負の形をとった末路。その時、奥義の反動だろうか。腰に激痛が走った。

「……どうやら、私の腰も戦闘不能のようです」

あまりの激痛にうずくまってしまう。久しぶりに体を動かしたからでしょうか。あまり歳をとりたくないものです。

「うわあっ……、アルフレッド！」

「へ？何だい？」

どうやらアルフレッドさん達の方も無事に不死者^{ゾンビ}を倒す事が出来た様です。

「不死者^{ゾンビ}はいないけど、菊が腰を押さえてうずくまってるよ」

「何だって！？」

子供の様に心配そうに駆け寄って来るアルフレッドさん。そう言うアルフレッドさんだって所々擦り傷を作っているというのに。後で私が手当てしろと言われるのでしょね。こつ言つ時にマシューさんがいらっしやると助かるのですが。

「しっかりしろよ、菊！」

「アーサーさん、体を揺さぶらないで下さいよ。腰に響きます……」

ただ今パニック中のアーサーさん。何故いつも彼はパニックになると人を揺さぶるのだろう。逆に腰に響いて痛みが増す。

「えーっとね、アーサー。菊、凄く痛そうだよ？」

「そうだぞ、アーサー！」

珍しく空気を読んだ二人。すると、近くにエリックが具現する。やつと出て来れたと言う顔をしていたがこの状況を見て絶句。

「まったくうるせえぞ！……おいエリック。お前は妖精さんに連れて来てもらえ」

菊の腰がヤバイから反対は全面的に認めないと珍しく言い切ったアーサー。そう一方的に言われて何も言い返せないエリック。そしてアーサーさんは私の視線に気づき、

「べ、別にお前の為じゃないからな！」「H A H A H A ! !」……つて、笑うなよアルフレッド！！」

アーサーさん、ツンデレ全開ですね。

『……おい。大丈夫か？』

アーサーの指示がないのでまだ飛ばされてないエリック。

「いえ。もう、若い頃の様にはいきませんね」

『一体何歳なんだよ……』

おいおいとエリックのツツコミが入る。エリック君、中々やりますね……。

「まあそれは置いておくとして……。アーサーさん、家に早く帰ってくれとありがたいです」

アルフレッドとまた言い合っていたアーサーの顔色がとたんに悪くなる。やっと私の腰の状態に気づいてくれました。

「あ、ああ……。妖精さん、力を貸してくれ!!」

光に包まれ、気づいた時には家の前。瞬間移動魔術って本当に便利ですね。空を見ればもう夕暮れ時。朝の内に夕飯の準備をしていて正解でしたね。するとフェリシアーノがそつと支えてくれた。私の腰を気遣ってくれているようです。

「フェリシアーノ君、ありがとうございます」

「良いよ。菊はお爺ちゃんだからね」

そう笑うフェリシアーノ。その笑顔は何故か曇っていた。それを不審に思いながら至って普通に返事を返す。

「……そう言い切られると傷つきます」

「H A H A H A!!でもお爺ちゃんじゃないか!」

高笑いするアルフレッドにアーサーの本日何回目か分からない怒鳴り声が響く。

「って言うなよ、アルフレッド!!」

「アーサーの意見は聞かないんだぞ」

また喧嘩を始めた二人。えっと……とフェリシアーノは言葉を探していたが見つからなかったらしく、諦めて事務所のソファアに座らせてくれた。そして何故か隣にエリックがちょこんと座る。

「じゃあ菊。俺もう帰るね」

あまり帰りが遅いと兄ちゃんが心配するんだと踵かかとを返しかけたその背中に菊は、

「ちょっと待って下さい、フェリシアーノ君」

静止をかけた。

「え、何？」

「二つ聞きますよ？フェリシアーノ君はエリック君の事、覚えていますか？二つ目は、実力を隠していますか？」

12（後書き）

菊「さあ、フェリシアーノ君？」

フェリシアーノ「次の話ではつきりするから勘弁してよー!!」

アルフレッド「へ？菊、何がだい？」

菊「それはですね……」

フェリシアーノ「ネタバレは止めてー!!」

フェリシアーノの明るさから驚く程、その目は静かだった。そして、

「エリックって人については、覚えてないよ」

「え？」

思わず聞き返してしまう菊。ならばあの懐かしいと言っのは一体…。

「ただ名前を聞いたら寂しい様な何だか分からない気持ちになるんだ。後、あの仕込み刀はアントーニヨ兄ちゃんが護身用にくれたんだよ」

凄いよね〜と笑いながら言う。アントーニヨと言う名前には全く聞き覚えが無い。たぶんフェリシアーノの知り合いなのだろう。

『アントーニヨか……』

どうやらエリックもアントーニヨなる人物を知っていたらしい。

「えーと、後は実力だよね？別に隠してた訳じゃないけど、あれは爺ちゃんとローデリヒさんが教えてくれたんだよ〜」

『あのローデリヒが!?!』

あり得ない！と隣で叫ぶエリック。ああ……、叫び声が腰に響きます。

「はあ……」

……何だかフェリシアーノ君が話せば話すほど余計分からなくなるのは私の気のせいでしょうか。それとも私が理解出来ないだけなのでしょうか。

「あ、これで全部答えたよね？じゃあ、またね」

玄関の扉に手をかけようとして……、反対側からいきなり扉が開いた。扉を開けたのはアルフレッド。そのまま通ろうとして入口にいたフェリシアーノにぶつかる。

「え？」

普段ならここでHEROが先に行くんだぞ　とか何とか言うのに何も言わない。

「どうかしましたかアルフレッドさん。アーサーさんは「帰ったよ」……え？」

いきなり遮られた言葉。帰ろうとしていたフェリシアーノもアルフレッドの様子が心配らしく扉を閉めて戻って来る。

「アーサーさん、何かあったんですか？」

「……たんだ」

「え？」

うまく聞き取る事が出来なかった。ただ、菊に感じ取れるのはそれが重要な事だと言うこと。

「ピーターとマシューが誰かに襲われたんだ」

13（後書き）

二章は平和的な終わり方をしません、すみません……。
今回はエリック（神聖ローマ）とフェリシアーノの事を書きたかったのに微妙な感じで終わってしまった。
宮原、反省です。

* Prologue *

寂れた廃墟の中に青年が入って行った。そしてその廃墟の壁を懐かしそうに撫でる。

「やったよ親父、皆。やっとアイツに復讐出来る」

ここで起こった惨劇を知る者は今や自分一人。ならば、その罪を今お前の友人の命で購わせてやる。もう一度壁を撫でると廃墟を出た。青年はもう振り返らなかった。

アルフレッドにしては珍しく動揺していた。アーサーの妻にして義理の姉のエリーゼが亡くなってからほとんどなかったと言うのに。話によると、アーサーは妖精からその連絡を受けて一足先にロアンに戻ったらしい。きっとアルフレッドも心配でアーサーに付いて行きたかったに違いない。でも、誰かが自分達に知らせなくてはいいかなかった。だからアルフレッドはセリアに残ったのだろう。

「アーサー、君は勝手だよ。もし俺がこっちにいる間にマシュー達
が死んだら……」

顔を真っ青にして言うアルフレッドに普段の明るさはない。

「お、落ち着いてよアルフレッド」

『そうだ。マイナス方面に考えるな』

兄に今日は私の家に泊まると伝えたフェリシアーノとエリックはアルフレッドをなだめにかかっていた。前もそうだった。何だかなと言いながらアルフレッドはとても家族思いなのだから。

「……ロアンに行きましょう」

実際に行つて安否を確認しない限りアルフレッドは安心出来ないはずだ。

「え？」

「そ、そうだよ。安否の確認も出来るから良いんじゃないかな？俺の知り合いがロアンの近くに住んでいるから、頼めば船だつて出して貰えるよ」

お願いだからちょっと落ち着いてよと焦った様に言う。フェリシアーノは、普段なだめられる方なのでなだめ方は知っていても慣れていないのだ。

「うん、ありがとなん「フェリシアーノ！！」だぞつて……ロヴィーノ！？」

鍵の閉まった玄関からロヴィーノが何の断りもなく入って来た。

「あれ、兄ちゃん。どうしたの？」

「どうしたもこうしたもねえよ。何だ、マシュー達が襲われただろ。だから気になってジャガイモ野郎の様子を見に行っただよ。そしてたらアイツ、部屋で血だらけになって倒れてたんだ」

さつとフェリシアーノの顔色が悪くなって行く。確か私の記憶によればロヴィーノ君も暗い所が苦手なはずです。

「もしかして、この暗い中を走って来たのですか？」

一秒も開けずに、

「んなの当たり前だろ！後、ジャガイモ野郎はしっかり生きてるから！..」

「兄ちゃん……」

ロヴィーノの不器用な優しさを感じて涙目になっているフェリシアーノ。

「と、とにかく俺はお前らに付いて行くからな！」

アーサーさんと同じく複雑なツンデレをお持ちのようです。

「H A H A H A！！俺は大歓迎なんだぞ」

どうやらアルフレッドさん、何とか復活出来たようです。あのまま暗かったら私は鬱うつになってしまいますから。そんな時、事務所と家

を仕切る扉が開き、

「そうなんだぜ！」

突然、勇洙^{ヨンス}が姿を表した。白いパジと呼ばれる太めのズボンに短めの青いチヨゴリを着ている。どうやら今さっき町に出している露店から帰ってきたらしい。

「「「「え？」「」「」」」

偶然声が被った。皆考えている事は同じだったらしい。だが勇洙^{ヨンス}は全員の声が被ったのを無視して、

「俺は菊に付いて行くん「来ないで下さいね」……だぜ!？」

* P r o l o g u e * (後書き)

菊「いつの間にか観覧者数が物凄いいことになっていますね」

アルフレッド「まだ投稿しない予定だったんじゃないのかい？」

菊「作者の妹のテストが終わったようですね」

アルフレッド「ふん。あ、後お知らせなんだぞ！この章は長すぎるから上下で章をまたぐらしいんだぞ！！」

勇洙ヨンスにそう言い放った菊。菊は勇洙ヨンスに何処か甘い所があった。その事について聞けば、「勇洙ヨンスさんは私の古い知り合いの息子なのですよ」と返ってきた。だからからか勇洙ヨンスにはたとえ断る時もいつも八つ橋に包んで話していた。一体二人に何かあったのだろうか。

「でも……」

なおも食い下がる勇洙ヨンス。勇洙ヨンスが困っている、ここはHEROの出演なんだぞ。

「良いじゃないか菊。仲間は一人居ても多い方がいいんだぞ」

「ですがアルフレッドさん。彼は……」

何でそんなに頑ななのだろう。もしかして菊、勇洙ヨンスを心配している？

「覚悟は何時だって出来ているんだぜ!」

ぐつと親指を立てて見せる。

「じゃあ勇洙ヨンスも一緒だね」

またよろしくねと握手をしているフェリシアーノ。よく考えたら皆菊の意見を見下ろしてないかい? (↑一番無視している)

「精々俺の足引つ張るなよ」

「それはこっちの台詞なんだぜ！」

ロヴィーノは勇洙ユンスと喧嘩を始めたんだぞ。全く、二人共子供なんだぞ。

「はあ……」

菊が深い溜め息を吐く。まだ腰が治ってない菊には喧嘩を見ているだけできつそうだ。

「大丈夫かい？」

一様声をかけるが見ている限り、あまり大丈夫そうではない。

「……。私、今から20年くらい引きこもって来ていいですか？」

「また引きこもるのかい！？」

そう言えば、アーサーに連れられて菊と会った時も引きこもり気味だった。だからあの頃は俺とマシューでよく遊びに連れ出したものだ。すると菊が何か覚醒した様に顔を上げて、

「そして、20年後に私は世界にヲタ魂の覇をもたらして見せます！」

妙に意気込んで見せる菊。だが、引きこもりと全く関係ない気がする。

「ってそれは引きこもりと全く関係ないじゃないか!!」

思わずツツコンでしまったんだぞ。危うし菊。

「ごほん。まあ、冗談はさておき……」

あ、あれは冗談だったのかい？何か目が本気だった様に見えたんだぞ。

「そろそろロアンに向かいましょう。勇洙^{ヨンス}さんも何故が行く事になつていますが「細かい事を気にするのはお年寄りの悪い癖なんだぜ」……勇洙^{ヨンス}さんは柱に縛り付けるとして、行きましようか」

方やにこりと笑って何処からか縄を取り出す菊、逃げる為に構える勇洙^{ヨンス}。まさに一触即発、その時だった。突如事務所の玄関が吹き飛んだ。

「え？何？」

恐いよ、兄ちゃんと兄のロヴィーノにくつつくフェリシアーノ。縄を持って勇洙^{ヨンス}と対峙^{たいじ}していた菊も縄を日本刀に。勇洙^{ヨンス}もヴァルガス兄弟を庇う様に前に出た。持っていた刀は菊の日本刀に比べるとやや反り身な物だった。アルフレッドも一様両手を銃に手をかけている。こんな時の為に銀弾は既に装填済みだ。こちらが構えたのが見えたらしく侵入者はゆらりと立ち上がる。月明かりに照らされて見えたのは黒髪の少年だった。その小柄な体には菊の着る和服と似た様な形をした水色の物を着ていた。だが、月明かりの角度が悪いのか顔までは見えない。

「一体こんな夜遅くに何の用だい？」

アルフレッド達からすればまだ早い時間だが目の前の少年からすれば遅い時間。セリアではこんな時間に子供が一人出歩く事は許されていないのだから。少年はアルフレッドの問いに無言だった。そして、背中に背負った布袋から刀を抜く。

「待て待て待て！お前は俺達に一体何の用なんだ？」

ロヴィーノが急いで制止をかける。刀を構える少年にその制止が効くかどうか賭けたった。

「……………あんたらを殺しにきた」

「！！！」

皆が動揺する中、少年は迷わずアルフレッドに斬りかかってきた。その斬撃を銃を交差させる事で防ごうとする。少年はそれを見越した様に刀を少しそらした。銃で防ぎたいが間に合わない。

「「防御の壁よ、Barrier！！」」

ぎりぎりの所で不可視の障壁が二重に展開され、少年のもつ刀を弾いた。そのお蔭で刺さりそうになった刀が腕をかすただけで済んだ。

「ま、間に合ったね兄ちゃん！」

「ふん。この俺にかかれば刀なんてこんな物だ」

「あれ？兄ちゃん、俺は？」

呑気なやり取りをするヴァルガス兄弟。どうやら彼らが斬撃を防いでくれたらしい。

「防護魔術、ホントに助かったよ」

菊達前衛二人の後ろに下がりながら言う。すると、ロヴィーノは照れた様に顔を赤くしていた。意外と照れ屋なのかもしれない。

「勇洙^{ヨンス}さん、来ますよ！」

アルフレッドは菊の警戒を呼びかける声で考えを一時中断し、銃で少年^{けんせい}を牽制する。

「それ！」

と剣を横に一閃。少年は刀を受け止める様に振ったと思いきや、刃先を急激に反転させた。これを勇洙^{ヨンス}は脇差で受け止める。一体何時から持っていたのだろうか。そのまま体をひねって入口側へとぶっ飛ばす。

「菊！コイツ、意外と手練れだぜ！！」

後ろを向かずに言う勇洙^{ヨンス}。どうやら少年の追撃を警戒しているらしい。

「そうですか。では……」

次に言った菊の言葉に少年以外の全員が凍りついた。

「では……、お引き取り頂けないならば斬るしかありませんね」

静かなる殺気。先程まで腰を痛めていた菊とはあまりに雰囲気の違い過ぎた。

「……さすが『黒の撫で斬り』。あの『日の和』虐殺の生き残りだけある」

01（後書き）

菊「はい。今回は章の名前となっている襲撃者登場です」
アルフレッド「でさ、菊。ヒノワってなんだい？」
菊「ネタバレです」

外伝 追憶の時（前書き）

今回は全く本編に関係ありません。
王と菊の出会い、過去を回想的に書いてみました。

外伝 追憶の時

ゴツン 痛そうな音をたてて一冊の本がアーサーの頭に落ちてきた。そのまま連鎖する様に本は雪崩の様に落ち、遂にはアーサーを生き埋めにした。

「ぶはっー!!」

いくらアーサーが18でそこそ身長があっても一棚の雪崩は痛い。体を埋め尽くす本を退けていると一冊の本が目止まった。いかにも古そうな本で所々ページの端が破れていた。菊がこのセリアに來た当時の物なのかもしれない。

「一様菊に渡しておくか」

被っている埃を払い、題名を見るが何も書いていなかった。

「何だ、この本？」

ページをめくり、何か書いていないか確かめるしかない。本に手をかけ、ページをめくった瞬間、アーサーは光に包まれた。

最悪の不幸と最良の幸運は重なる。

町を抜けた先に子供一人が入れるくらいの大きさを持つ祠がある。短めの黒髪に薄い水色の和服の少年はそこを目指してひたすら走っていた。5、6歳くらいの少年には背中に背負った包みは重いが、これは捨てる事が出来ない大切な物。ようやく見え始めた祠の近くには数人の町人が血を流して倒れていた。子供の彼でも分かった。彼等がもう死んでいると。それを見て縛れる足を必死に動かしながら祠の中に潜り込む。祠の中でほっと一息ついて、

「父上、母上……」

町から逃がしてくれた父と母の姿が脳裡に浮かんた。ただの町人に過ぎない二人があゝの戦闘の中で生き残れるだろうか。いや、きっと……。

『菊、決して声を出さないで祠に隠れていなさい』

『また後でな』

と頭を撫でられた感覚が甦る。そして目に涙が滲んできた。きっともう会う事は出来ない。彼は祠の近くで町人が殺されても、町の方から爆撃音がしたとしても声を出さずに身を潜めていた。あれからどれくらいたったのだろうか。もう物音一つ聞こえない。空は茜色にそまり、今が夕方である事を語っている。祠から出て少し様子を見るべきか、見るべきでないか。もう護ってくれる両親はいないのだから慎重に判断しなければいけなかった。その時、一人分の足音がした。

「久しぶりにこの町に来るあるな。ここのお茶や香は品質も良いから大好きある」

特徴的な話し方をする人の声だった。髪を低い所で結び、美しい紅の服に近くの町の伝統的なズボンの青年。背中にはやや大きめのリュックサックが背負われており、何故か両手でパンダを抱えていた。祠の奥から様子を伺っていたからだろうか。その青年と見事に目があってしまった。

「な、何かそこに居るあるか！」

もうここには隠れられない。菊は近くに置いていた包みを持って祠の外に出る。

「何だ。この先の町子供あるか。どうしてこんな所に居るある？話すよろし」

「……」

青年の質問に菊は答え様としたが……、声が出なかった。困惑した表情になった菊を見て青年は何を思ったのだろうか。よしよしと菊の頭を撫でた。

「無理に話す必要は無いある。話せないならせめて理由だけでも地面に文字を書いて欲しいあるよ」

それならと祠の近くにあった木の枝で町の状況やここに居た理由を書く。全ての説明が終わった後に青年は、

「そう、あるか。あの町が戦争に巻き込まれるとは思って無かったある……。まあ、それはそうと私はお前はどつするあるか？」

今の世の中、子供一人じゃ生きていけねえーあるよ？と問いかけてくる。そんなの菊だって分らない。いきなり町で戦闘が始まり、両親に持たされた物と必死に逃げて来たのだから。それを地面に書いて伝えると、

「……それなら、我^{わたし}と来るよろし。我^{わたし}も独り身だから子供の一人や二人は大丈夫ある」

驚きで木の枝を取り落とした菊を見て、またよしと頭を撫でる。

「我^{わたし}は王耀^{ワンヤオ}ある。町で商売中の時は耀^{ユエ}って呼んで貰えると助かるある」

混乱中の菊をどうやら読み方が難しいと捉えたらしい。

「なんならにーにでも良いあるよ？」

……確かにそちらの方が子供の菊には呼びやすい。でも、本当に付いていって良いのだろうか。それを地面に書き付けると、

「そんなの気にする必要無いある。お前も我^{わたし}と同じエルフじゃねえか。……それに、何かほっておけ無いあるよ」

菊はペコリと頭を下げて、自分の名前を地面に書く。

「本^{ほん}田^だ菊^{きく}あるね……。じゃあ菊って呼ぶある」

王^{ワシ}が行くあるよと町と反対に向かつて歩き始める。それに包みを持った菊^{キク}が付いて歩く。それが幼い菊と王耀^{ワシ}の出会いだった。

心の傷。それは何年経っても癒える事の無いもの。

黒髪に緑の深衣の青年が子供の身長ではすっぱり隠れてしまう様な茂みを両手に持った三日月刀（シミター）で一人が通れるだけ切り払う。その後ろを黒髪に真っ白な水干の7、8歳くらいの少年がぴたり付いて回る。滅多に見られないだろうし、見たとしても何とも言えない奇妙な光景だった。青年は顔色一つ変えずに後ろをぴたりと付いて来る少年に氣遣うように問いかけた。

「菊、疲れてないあるか？」

少年は話せないのだろうか。少し考え、遠慮する様にコクリと頷く。青年、王^{ワシ}には少年、菊が自分に対して遠慮しているのだろうと感じていた。山道を使う時は大概こうで着いた休憩所で無表情ながらばてているのをよく見かけた。だが、ここで休ませようとするとすぐに機嫌が悪くなる。変に遠慮しているというか何というか……。

「疲れたらちゃんと言っあるよ。山道は普通の道と違って体力使うあるからね」

もう何度目か分からない注意をしておく。菊の場合、ここでちゃん

と言っておかないと自分が疲れている事に気づかずに歩き続けてしまうからだ。まあ、我^{わたし}が何と言っても菊は疲れてないと主張するが……。せめてもの救いは山道の要所、要所に休憩所がある事だ。既に周りは薄暗く、足元も見えにくくなっており、子供の体力ではキツイ筈だ。きっと今日は休憩所にたどり着いて終わりだろう。

「菊、今日はもう少しで見える休憩所に泊まるある」

菊の無表情な顔に微かな動揺が走る。大丈夫と言ったばかりの事だったから自分が氣遣われたとも思ったらしい。とある事情により、この近くを夜に歩く訳にはいかないのだ。なだめる様に軽く菊の頭を撫でて、

「とにかく休憩所まで急ぐあるよ」

菊でも辛くないくらいに足を速めた。

休憩所は丸太で作られた小さなログハウスだった。暖炉もあるらしく、屋根から太い煙突が伸びている。何とか夜になる前に休憩所までたどり着く事が出来た。きちんと休憩所に備え付けられた鍵を閉め、床に座り込む。菊も背中に背負った荷物を床に置いてちょこんと座った。一見何ともなさそうな顔をしているがこう見えてとても疲れているのだ。ちよっとスピードアップし過ぎたのかもしれない。今は考えても仕方ないだろう。薪を暖炉に放り込み、行商の荷物が

ら水と米と保存用の野菜を取り出す。まず水を暖め、そこに野菜を適当に入れる。仕上げに醤油を入れれば……、簡単な雑炊の出来上がりだ。完成を見てから、また新たに荷物から二人分のお椀と行商中に見つけたスプーンという物を取り出す。このスプーンという小さな匙、意外と便利で使いやすい。お椀に雑炊をよそって菊に渡す。話せないからかペコリと軽く頭を下げ、礼を言い、お椀を貰う菊に前から育ちの良さを感じていた。

「礼は良いある。暑いから少し冷ましてからゆっくり食べるよろし」

そうしたら菊は少し冷ますためにかお椀を近くの床に置いて冷めるのを待っていた。その仕草は近くで居眠り中のパンダにそっくりだ。これで菊が話せれば完璧だ。だが菊にはまだ無理だろう。近頃は野生動物に襲われた時、一緒に戦う様になったがまだまだ日本刀に慣れていないらしくしょっちゅう切り傷を作っている。見た目は7、8くらいだが彼は現在16。エルフの証である遅い老化だった。王^ワは菊を見ながらいつか菊は我^{わたし}から独立するのだろうなと思う。すると、

「……っ！」

どうやらお椀がまだ熱かったらしい。意外な熱さに驚いて菊がお椀を床に落とした。幸いお椀は割れていなかったが、雑炊は全て溢れていた。王^ワは落ちた雑炊に目もくれず、

「大丈夫あるか？火傷した所、見せるよろし」

そう言った。おずおずと火傷した方の手を出す菊。指先が少し赤く腫れていた。王^ワは荷物から火傷用の薬を取り出して付けてやる。

『ごめんなさい』

青い顔をした菊はそう書いた紙をそつと見せてきた。

「まあ、怪我がなくて良かったある」

心配しなくていいあると頭を撫でてやる。まだ菊はエルフからすれば幼い。もし独立するとしてもたぶん数十年先になるだろう。

「気を取り直してもう一回作るある。菊、作り方と材料はこうあるよ」

それなら我が知っている知識を全て菊に教えよう。菊をこの世界で生きていける様にしなくてはいけない。何者にも縛られず、自由な生き方が出来るように。王はそう心に決めて菊に向き直った。

ほんの些細なきっかけだった。王も菊と一緒に旅暮らしをして早十数年。そろそろ菊の親について聞いてみよう、そう思ったのも王の気まぐれだった。ログハウスの中で荷物の準備中だった菊は、

「え！？そんなに突然ですか！！私、話せるでしょうか……」

出会って十数年、王は未だに菊の声を聞いた事が無かった。だからだろうか。菊が話せる様になって余計に嬉しかった。菊の両親の話はそっちのけ。精神的な傷が癒えた訳では無いのかもしれない。が、

十数年も筆談しか出来なかったのだからやはり嬉しいものだ。

「き、菊が喋ったある!？」

突然だった為か菊を指差した指はふるふると震えていた。菊は言われて気づいたのだろうか。

「あ……。本当ですね」

実感無さげにそう言った。初めて聞いた弟の声はまだ声変わりを迎えていないらしく高い。

「すげえある!すげえある!!菊が話したある!!!!!!」

これは一大事だ。今すぐお祝いしないと。頭の中で計画を立て始めた王^{ワン}。すると菊に、

「王^{ワン}さん、騒ぎ過ぎですよ……」

と逆に窘められてしまった。だがこれで夜に誓った事を実行出来る。何時まで一緒に居られるかは王^{ワン}にもわからない。これは菊が決める事なのだから。

「悪かったある。でも……、街でお祝いするある!!」

「王^{ワン}さん!？」

菊と一緒に居られる時間が短かろうと関係無い。そう思い、また驚きの声を上げた菊をからかう事にした。

ここで出会ったのはもはや偶然なのかもしれない。

山を切り開いた所にその街はあつた。なだらかな丘陵地帯をへて続くその街はお世辞でも治安が良いとは言えない。掏摸すりや騙し、強盗何て当たり前。それが無い日というのはある意味奇跡に近かった。菊が王ワシとこの街を訪れて早三日。だが、これと言つた用もない限りは王も宿から出ようとしない。菊達はこの街での行商の為に寄つた訳ではなく、この街で色々と買い揃えないと道中街が無いと言つ仕方ない理由があつての事だつた。事実、宿の中は清潔で辺りの喧騒は聞こえてきても巻き込まれる事は無い。つまり、宿はこの街唯一の安全地帯と言つても過言では無かつた。

「暇ですね」

ここ百年の内に菊も大分身長が伸びた。と言つても見かけは15歳に届くか届かないくらいだが。

「ああ、暇ある」

王ワシは特に変わつてはいない。やはり大人だからだろうと思う。菊だつて宿に籠こもるのは別に構わない。だが、籠こつてばかりだとやる事もなくなり暇をもて余す事になるのだ。

「菊は陰陽術の練習すれば暇を潰せるけど我わたしは鍊丹術師。やれる事

が少ないある」

「王^{ワシ}さんも陰陽術を勉強したら良いのでは？」

「理論も機構も錬丹術と全然違うから無理ある」

術の生まれた地方は近いのにこう術式が違うとイライラするある！とベッドにダイビング。買い物さえ終われば引きこもる、こんな生活が続かなかつたら王^{ワシ}もここまでキレなかった。が、今この街から出られないにはちゃんとした理由があるのだ。それは、

「大体こんな寂れた街で検問があるとか信じられねーある」

たまたま菊達が街を訪れた時、検問期間だったのだ。それにはとても驚いたし、何故だろうと言う疑問もあった。

「まあまあ王^{ワシ}さん。私も早くここを出たいのは同じですから」

「ホント、我^{わたし}もそう思うあるよ……」

そうだ菊、今すぐあの検問を突破すればいいある！と名案だとばかりに言った王^{ワシ}。それはさすがに行商に響くのでは……。

「……って王^{ワシ}さん。本当に準備しないで下さい」

まさか本当に荷自宅を始めてしまうとは……。よっぽどこの街から出たいのだろう。

「菊も早く準備するある」

「はあ。どうなつても……『触るな!』……はい?」

声は外から聞こえてきた。カーテンをほんの少しだけ開け、そこから辺りの様子を窺^{うかが}う。まだ5、6歳くらいの体格の茶色の髪の少年が見えた。その少年に掴まっている少女も兄妹なのだろうか、同じく茶色の髪だった。見た所、その少年達を柄の悪そうな男達が取り囲んでいる構図だった。同じくカーテンの隙間から外を覗いていた王^{ワシ}がずっと立ち上がり、窓に手をかけようとする。でもそれを王^{ワシ}にやらせる訳にはいかない。

「王^{ワシ}さん、それはダメです。貴方がやれば行商に響きますから。私の荷物、ちゃんと持ってきて下さいね?」

「……全部お見通しあるか。なら街を出て北の小屋で会う、それで良いあるね?」

「はい。それでは後で……」

王^{ワシ}に変わって窓を開けると外に身を躍らせる。幸いこの宿は二階だ。足に大した衝撃もなく着地し、柄の悪そうな男達を見据える。1、2、3、……7、8、9、10。相手はたったの十人。

「子供虐めは見過ごせませんね?」

努めて冷静に言葉を紡ぐ。

「んだコイツ?でしゃばりやがつて。このガキ達はエルフだぜ?人間じゃないんだ」

そうか。この子達はエルフだったのか。だが、それにしても小柄過

ぎる。多分ろくに食べていないのだろう。半分納得、そしてもう半分は怒り。

「人間でなければ虐めて良いんですか？」

「ああ？このガキ、好きに言わせとけば……」

背中で日本刀を止めていた紐を解き、水干の懷にしまう。そして居合い抜きの要領で日本刀を男の首筋で寸止めする。剣圧は真空波となって男の首筋の皮一枚を浅く斬る。これ以上この男に話させる気は菊にない。

「ガキとは失礼ですね。こう見えて私、100歳越えているんですよ？」

にこりと笑って見せる。それが彼らにどう見えたのかは知りもしない。ただ分かるのは先程の男が氣絶した事だけ。手に持った日本刀を中段に軽く構えて男達を威嚇する。元々統制のないグループなのだろう。残りは氣絶した男をほって逃げていった。ほっと一息吐いて日本刀を鞘へと仕舞う。それを見届けた少年達は明らかに菊を警戒していた。助けたとはいえ、赤の他人。まあ、当然の反応だろう。菊が言えるのはただ一つ。

「私達は旅をしています。どうです、一緒に来ますか？」

街を出られる、そう呟いた兄妹は迷った素振りすら見せずに行くと言った。その返事に微笑み返して、転移魔術を発動させる。転移の指定先は王が居る筈の街から出て北の小屋だった。

菊は上手くやってくれただろうか。あの後菊が窓から飛び出したと同時に王も小屋に向けて転移していた。だから彼が無事か気になつて仕方がない。大体自分の考えを読むのが上手い菊に何を言つても大丈夫程度しか返つてこないだろう。その時、転移魔術テレポルトの光が現れた。

「菊、ぶ、無事あるか!!」

見たのは怪我一つしていない弟の姿。子供達もちゃんと居た。

「はい、私も子供達も無事ですよ」

苦笑した菊を見てほっと一安心。そして、子供達に向き直る。そう言えば……、菊を拾った時も似た様な状況だった気がする。

「我は王耀わたし ワンヤオある。こっちは自慢の弟の本田菊。お名前言えるあるか？」

自慢の弟と言つた時に視界の端で菊が恥ずかしそうにそっぽを向いたのが見えた。全く、素直じゃない。

「……俺が香シャン。こっちは鈴リン」

「香に鈴あるね、分かったある。歳は幾つあるか？」

王もそこそ歳がいつてそんな気がしなくてもない。菊でさえ、あ

の見た目で100を余裕で越しているのだから。

「15歳と5歳」

恥ずかしがりやなのか、警戒しているのだろうか。少女はずっと香シャンの後ろに隠れたままだった。

「分かった。我達わたしはここからずっと北に行った所にあるセリアと言う街に行くある。お前達は来るあるか？」

すると、ずっと香シャンの後ろに隠れていた少女がちょこっただけ顔を出した。そして、

「香シャン。私、この人達と行くヨ」

少したどたどしい鈴リンの言葉。あの街に住んでいて、しかも5歳でここまで話せれば大したものだろう。

「……分かった。鈴リンが行くなら俺も行く」

そう言った香シャンに今まで話に加わらなかった菊が、

「よろしくお願いしますね？」

と二人に声をかけていた。この出会いは偶然なのか、偶然でないのか。ただ分かるのは可愛い家族が二人増えた事だった。

別れとは突然やって来るものだ。

『運命』

緑豊かなセリアに家族四人で住み始めて何年経っただろうか。何時しか王^ワは恋をした。露店に來た人間の女性に目を奪われた。これが俗に言う一目惚れ、と言うのだろうか。菊も女性探しに随分協力してくれた。それはこの物語が始まる約60年前の事。そしてその女性^シ星との間に男の子が生まれた。とても嬉しかったし、その子が可愛くて仕方なかった。だが人間である星^{シン}がずっと生きていられる筈もなかったのだ。彼女は男の子、勇洙^{ヨンス}が生まれて10年後に病気で亡くなった。菊達には彼女が人間である事を伝えていなかったのもあって彼女が死んだショックは大きかっただろう。特に勇洙^{ヨンス}はまだ幼かった。悪い事をしたと思う。それからだろうか、このセリアに居るのが辛く感じる様になったのは。ここには彼女との思い出が多すぎるのだ。だからだろうか。長年していなかった行商を再開しようと思った。香^{シャン}、鈴^{リン}、勇洙^{ヨンス}は王^ワと行く事になったが菊はここに残ると言う。理由はやはり彼の故郷と雰囲気や風景が似ているから離れたくないとの事だった。そして別れの時。

「皆さん、どうかお元気で」

着流した藍色の和服に同色の薄い羽織を着た菊が街の出口まで見送ってくれた。

「菊……」

すまない、そう思っていた。王^{ワン}がこの街を出るのはただ辛いだけだというのに。

「体にはお気をつけ下さいね？」

何故菊はあんなに優しく笑って送り出せると言うのだろうか。昔^{フシ}から氣遣いの出来る優しい子供だった。そんな菊だったからこそ王^{ワン}は自分の知識を全てに教えたのだから。

「菊こそ、氣をつけるあるよ？」

「はい」

今度こそ振り返らずに街の門を潜る。自分はまたこのセリアに戻ってくるだろう。

「な、何だったんだ。今の……」

久しぶりに菊が本の整理をすると聞いてアルフレッド、マシュー、エリーゼと共に手伝いに来た。が、たまたま落ちてきた本に何故か氣になり、本を開いてみたらこうなった。もしかしたら……、この本は誰かに読まれるのを待っていたのかもしれない。そして現れた王^{ワン}耀^{ヨウ}と言う今では知らない者はいない程の鍊丹術師と幼い頃の菊。ただアーサーはそれを菊に確かめるつもりは全く無かった。

「アーサーさん。雪崩の様な凄い音がしましたが大丈夫でしたか？」

ひょっこりと顔を出した菊に見えない様に本を隠して、

「ああ。大丈夫……。「菊さん、アルが埋もれちゃった!!」。「アルフレッド君……。すみません、ちょっと見てきますね？」

と苦笑しながら廊下を歩いて行く菊。この本を隠すのならば今のうちだ。適当に並べていた本をあたふたと本棚に詰めると手に持っていた本をそつと入れる。

「さて、俺もアルフレッドを助けにいくか……」

そう言って部屋から出たアーサー。何処からか誰かの『ありがとう』と言う声が聞こえた気がした。

外伝 追憶の時（後書き）

今回は本編には関係無いです。

この外伝を書いた理由は完全に友達から言われたこの一言がきっかけです。

『宮原の小説の本田さんはミステリアスすぎない？』

他人に言われた事をいちいち気にして8000文字に及ぶ外伝を書いてしまいました。本編どうするんだ。

しかし、これで少しは皆さんにセリアでの菊の設定、名前しか出てきていない王^ワの事が分かったと思います。

最後に、誤字脱字を指摘してくれた後輩Y、後輩P有り難うございました。

「……。早く立ち去って頂けませんか？」

微笑を浮かべる菊。まるで下らないといった菊の反応に少年は怒りで顔を染めた。

「じゃあ……」

下段に構えていた刀を中段に構え直す。

「死ねよ!!」

一気に距離を詰めて刀で菊に斬りかかる。今まで話についていなかったアルフレッド達も慌てて武器を構えて応戦。ロヴィーノが近寄れない様に拳銃を乱射し、フェリシアーノが全員に防御魔術を付与。勇^{ヨンス}洙が前に立ち、アルフレッド、菊と続く。少年に拳銃を乱射しているロヴィーノも当てる事は考えていない。ただ少年を追い返す為の足止め程度と言った感じた。が、銃弾の一発が少年の腕を捕らえた。

「なっ!?!」

ロヴィーノもまさか当たると思っていなかったのだろう。驚きで引き金を引くのを止めてしまった。少年は銃弾の当たった腕を見て驚愕し、身を翻した。

「あ、ちょっと待つんだぞ!!」

が、追いかけようとしたアルフレッドの肩を菊が掴んでいた。

「菊!」

早くしないと少年は逃げてしまう。その思いで一杯だったアルフレッドを菊は先程の殺気を感じさせない様な優しい口調で、

「アルフレッドさん落ち着いて下さい。今はアーサーさん達の所へ参りましょう」

「でもっ!」

相手は自分達の命を狙ってきたのだ。そんな奴をほっておく何てHEROとして出来ないんだぞ。そう思っていたら頭に冷水が降ってきた。

「っ、冷た!」

「冷静になって下さいね。アルフレッドさん」

につこり微笑む菊。あ、何か雰囲気がいよ。だからっていきなり頭に冷水かけるのは酷くないかい。

「わ、分かったんだぞ」

アルフレッドがそう頷いたのを確認してから、ヴァルガス兄弟が知り合いに電話をかける。何か俺、皆に子供扱いされてないかい? (

↑ 実際一番年下)

「あ、アントーニヨ兄ちゃん？あの「さっさと船出せコノヤロー！」……って兄ちゃん」

こっちはこっちで凄い事になっている。フェリシアーノから電話を奪ってしばらく話していたロヴィーノ。話をつけたのかすぐにフェリシアーノ渡した。苦笑して皆に聞こえる様にするねと言って音量を大きくする。

『あー、あー。ちゃんと声聞こえとる、フェリちゃん？』

電話から聞こえてきたのは何やら陽気そうな声だった。何か何処かで聞いた事があるんだぞ。

「うん。聞こえるよ、アントーニヨ兄ちゃん」

『じゃあ船について話すで。今の所貿易船の相部屋やったら空いとる』

「あ、相部屋だと！？どうにかしやがれ、アントーニヨ！」

電話に向かって怒鳴るロヴィーノ。すると、何やら困った様な声が返ってきた。

『親分やって何とかしたいけど、今客船は問題があって全面ストツブ中なんや。だからロヴィ、相部屋で堪忍したって』

「あの……具体的に問題とは？」

今まで三人？の会話を黙って聞いていた菊がそう問う。

『ん？誰やるか』

「申し遅れました。私は本田菊と申します」

あ、電話の前なのにお辞儀してる。どうやら癖になってるみたいだ。

『そんな丁寧に言わんでええよ。えっと、問題やる。実は客船に変な幽霊が出るらしくてな。近いうちに連盟に依頼を出そうと思っていたんや』

「ゆ……、幽霊だって!？」

震え上がるのは何故かアルフレッド一人だけだった。なんだい皆して。幽霊だぞ、恐くないのかい？

『そうなんや。フェリちゃんやロヴィは幽霊苦手やから頼めんあて「それなら今から勇洙ヨンスさんと私で調伏しましょう。そうしたら、客船に乗せて頂けますか？」……へ？被ってくれるなら良いけど、今からつてもう10時やで』

「構いませんよ。遅くなるので三人は寝ていて下さい」

なら待つとくわと電話を切ったアントーニヨ。アルフレッドは驚いて勇洙ヨンスを見たら既に刀を背負い負え、準備をしていた。そして、

「菊と一緒に調伏、久しぶりなんだぜ!」

そう背伸びをする勇洙ヨンス。ちょっと彼、呑気過ぎないかい？しかも菊は腰が……。

「そうですね。三人共、ちゃんと寝ていなかったらエリック君が後で教えてくれますからね」

「で、でも菊は腰が……」

「さっきフェリシアーノ君から治療術ヒールをかけて頂いたので平気です」

それだけ言つと菊は勇洙ヨンスと港へ行つてしまった。菊は何をそんなに焦っているのだろう。確かにアーサーとはパートナーだったし、マシューとも面識があるから心配なのは分かる。でもアルフレッドはそれとは違う焦りを感じていた。何かを警戒している様な、そんな予感。

『どうしたアルフレッド？』

ロヴィーノが来てから姿を現さなかったエリックが隣に具現化する。どうやら二人は和室に動いたらしい。だから具現化したと言う事だろう。

「何故だか分からないけど、アーサー達が心配なんだ」

見た目は彼の方が年下だ。でも、中身は俺よりも年上。深く考える
と頭がごちゃごちゃになりそうだ。

『家族が心配なのは当たり前前の事だろ』

「うん。そうなんだけど……」

何だか分からないけど胸騒ぎするんだよ。菊は俺より早くそれを感じ

じていたからあんなに焦っていたのかもしれない。

「……アルフレッド」。早く寝ようよ」

「早くしないとお前だけ玄関だからな！」

和室から明るい二人の事が聞こえてくる。

「え！？そ、それは止めてくれよ！！」

慌てて和室へと走り出すアルフレッド。ヴァルガス兄弟が空気を読んでわざと呼んでくれた事には勿論気づかなかった。

02（後書き）

アントーニョ「何やここ？」

フェリシアーノ「あ、アントーニョ兄ちゃん！」

アントーニョ「おうフェリちゃんか。……で、ここ何処？」

フェリシアーノ「後書きだよ」

アントーニョ「へえ……。後書き言っんやな」

フェリシアーノ「そうだよ」

アントーニョ「何すればいいん？」

フェリシアーノ「分かんない」

アントーニョ「まあ……。フェリちゃん居るし、細かい事はええか」

浅い呼吸が呼吸器を白く染めた。頭や胴体からはおびただしい量の包帯が覗いている。アーサーはベットの上で青白い顔をして昏々と眠り続ける弟を近くマシユの椅子に座り、ずっと見守っていた。隣の椅子には泣きつかれたピーターがマシユのベットを少し借りて寝ている。着ていた服も所々破れ、お気に入りの水色の帽子は血でぐつしより濡れていた。で只今洗濯中。アーサーは泣きつかれた息子ピーターの頭を優しく撫でてベットの側をそつと離れた。病室を出れば《マシユ・ウィリアムズ》と書かれた表札が掛けられており、すぐそばのベンチには昔からの喧嘩仲間が座っていた。薄い柔らかな金髪にベージュのスラックス。首からは薄紫色のおしゃれなスカーフが覗き、白いシャツの上に薄手のコート。腰から護身用にレイピアを差した青年。青年は病室から出てきたアーサーを見て、

「マシユの容態はどう？」

それだけ聞いた。これが普段ならば軽口の一つや二つあるが雰囲気によりそこは自重したらしい。

「フランスか……。重体だよ、意識が戻らなかったらOutらしい」

悔しそうに俯く。目の前にフランスさえ居なければ声をあげて泣きそうなくらいだった。

「……そう。何ならお兄さんがしばらくピーターの面倒を見ようか

「？」

おどけた様に言っ て見せるフランス。ただアーサーを励まそうと
しているらしい。だが、

「てめえに任せたらピーターが変態になるだろ！」

アーサーは本気で受け取ってしまった。

「えゝ、お兄さんそう言う風に思われてるの！ショックゝ」

「前に酒場で何したか覚えてるんだろぅな……」

あれはアルフレッドが居なくなつてからの話。また見つけれずに
いつものパブで自棄酒を呷っていたら全裸のフランスがいた、と
言うものだ。一瞬で酔いも醒めたし、あれを見せれば相手が高い
身分であろうと蹴つ飛ばしてしまう訳で……。

「そりやもちろん。愛に溢れる俺が酔いどれ不憫紳士アーサーを迎
えに行つただけじゃない」

何事もなかった様に言うフランス。コイツ、絶対ふざけてるだろ。

「てめえの何・処・に愛が溢れてるんだよ。この変態ワイン髭野郎
……」

「だから変態じゃないつて。愛は俺の全てから……」「わー、変態が
いるゝ、ブリタニアビーム……」「ちょ、ちよつとアーサー！？何で
ビームがそんなに力強いの……？」

「くたばれワイン髭野郎!!」

最終的にマシューの病室前で喧嘩になってしまった二人。彼らはその後婦長にこっぴどく叱られ、掃除を厳命されたい。が、その掃除でも……、

「このバカワイン髭野郎!!」

「……お前、ちょっと元気になり過ぎてない?」

いつも通り喧嘩をしていたらしい。

03（後書き）

フランス「はぁーい！フランスお兄さんの時間だよ？」

アーサー「何でお前と一緒になんだよ！」

フランス「何でも『アルフレッドと本田が出てない』、それが理由みたいだよ」

アーサー「ありえねえ……」

病棟別館の廊下から何やら賑やかな声が聞こえていた。

「くたばれこの野郎！」

「ちょ、アーサー。お兄さん、本気でやられたらヤバイんだけど！？」

掃除用モップで大の大人が大喧嘩中。しかも辺りはモップの先から飛び散った水のせいで濡れている。

「綺麗にしないと婦長が恐いからさっさと片付けろよ、アーサー！」

「てめえがな！！」

駄目だ。このまま彼らの会話が終わるのを待っていたら一生待たないといけない可能性がある。廊下の端で彼らの喧嘩を見ていた青年が姿を現す。長い白のコートに灰色のスラックスが見えた。白っぽい髪によく似合う長く白いマフラー。青年は一息ついて、喧嘩中の二人に魔術の標準をあわせる。折角水がたくさんばらまいてあるんだからちよつと利用させて貰おうかな。

「雪よ、……c h e r ! !」

その瞬間、空気と水が音もたてずに凍りついた。床を踏みしめれば
パキリと氷が割れる音がした。うん、上出来。ちなみに廊下全体が
彼の魔術で凍っている。どうやら彼のちょっとした基準は一般常識と
はかけ離れたものらしい。

「さ、さむ……。アーサー、お前か？」

「んな訳ねえだろ！俺が知ってる奴でこんな真似が出来るのは……」

アーサーの視線が廊下に笑って立つ青年へと動く。

「イヴァン、お前だけだろ？」

イヴァンはアーサーの言葉に肯定の笑いを浮かべた。彼、魔術に関
しては人一倍鋭いんだよね。

「あはっ バレちゃった」

「あはっ 、じゃねえ！滅茶苦茶寒いだろーが！さっさと魔術解け
よ！ー！」

「君達が話を聞いてくれるなら解くよ」

またもやにつこり笑うイヴァン。彼らの喧嘩が長かったせいですつ
と聞く事が出来なかった。その聞く事さえなければ、そこそこ距離
のあるロアンに来るはずが無い。

「……OK / Oui」

二人同時に返事が返って来た。良いなあ、二人は仲がよくて。承諾

が得られたので魔術を解く。瞬時にあちらこちらに出来ていた氷の柱が溶けて、霧散した。

「それで……、話って何？」

代表してフランス君が僕に聞く。あれ？確か君は魔術使えないよね。まあ、でも今は利用出来る物は出来るだけ利用した方が有利かもしれないからいいかな。

「アーサー君の所を襲った奴がうちにも来たんだ」

「！？そ、それで！！」

「姉さんに手を出そうとしたから僕とナターリヤでボコボコリンにしたんだけど……」

ここからが重要だ。返答次第では気に入らないけど力を合わせる事になる。ん？何で二人共青い顔してるのかな？

「そしたらそいつ、この紙切れになっちゃったんだ」

ひらひらとアーサーとフランスに振って見せる。イヴァンでも読み解けない言語で書かれていた。ただ分かるのは誰かが放った式神である、と言う事だけ。

「確かに、この大陸で使われてる文字じゃねえな」

「そうだね……。これを使うのは陰陽師だけだもん」

そう。これは陰陽師が式神専用についた言語。魔術系統言語しか知

らない僕らに読み解けるはずがないんだ。

「陰陽師だけって。イヴァン、お前……。菊を疑ってるのか？」

信じられないと言った風な目で僕を見るアーサー君。そんなの、裏切られた事が無い人が言う戯れ言じゃないか。

「別に本田君だけじゃないよ。陰陽師全体を、かな」

「おいイヴァン。お前だって本田に会っただろう。ならそんな……」

「あくまで一様、だよ。襲われた以上警戒せずにはいられないんだ」

何も言えなくなったフランシス。彼は連盟に属している訳でもないし、何か特別な能力を持っているのかと言うわけでもないのだから。

「……。情報は助かった。でも、何でわざわざロアンに来たんだ？」

何も言えなくなったフランシス君をそこらにほっておいて聞くアーサー君。

「それはね……」

そんなに知りたいならととびきりの笑顔で言ってみせる。

「アーサー君が大怪我して、ベットでうんぶん唸ってる姿を一目でいいから見たかったんだ」

でも結局見れなかったけどねと言って歩き出す。数秒後、清々しい笑顔で廊下の角を曲がったイヴァン。後に残された二人がイヴァン

の言葉に顔面蒼白だったのは言うまでもなかった。

04（後書き）

イヴァン「後書きに出られるなんて嬉しいなあ」

アルフレッド「何で君が後書きにくるんだい！？それと、そのマブラーダサイぞー！」

イヴァン「うふふ……。アルフレッド君は喧嘩を売るのが好きだね」

アルフレッド「H A H A H A！！なんたって俺はH E R Oだからね！……」

本田「誰か、助けて下さい……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4290w/>

【APH】セリアの街の陰陽師

2011年11月23日17時46分発行